

令和 4 年度看護研究交流センター

活 動 報 告 書

令和 5 年 4 月



公立大学法人新潟県立看護大学
看護研究交流センター

巻頭言

穏やかな日ざしにいつしか春の訪れを感じる季節となりました。

令和4年度の当交流センターの活動は、感染予防に努めながら4部門における全ての企画を実施することができました。これもひとえに、ご参加いただきました皆様方のご協力とともに、実施にあたりご尽力いただいた関係者の皆様のおかげです。

改めて感謝申し上げます。

「地域社会貢献部門」の“いきいきサロン”は、新型コロナウイルス感染症対策を講じた上で計画した6回すべてを実施し、毎回80名程の方にご参加いただきました。今年度は、有線放送や上越ケーブルビジョンでのアピールを加えるなど、広報活動にも力を入れました。7月に開催しました“看護大・上教大連携公開講座”は「長寿の秘訣！健康で豊かに生きる」をテーマに開催し、約100名の参加がありました。

「看護職学習支援部門」の“看護職学習支援公開講座”は、看護研究支援コース4講座と看護現場に活かすコース3講座を全てオンラインにて開催しました。オンラインによる問題は確認されず、参加者からは概ね好評を得ることができました。“どこでもカレッジプロジェクト”については、今年度開催した看護職学習支援公開講座7講座のうち3講座をバーチャルカレッジの動画教材として収載しました。

「地域課題研究開発部門」における“地域課題研究発表会”、及び“上越地域看護研究発表会”は、昨年同様に会場参加とWeb配信を併用したハイブリッド形式で開催しました。しかし参加者の多くは、発表者とその支援者が占めており、参加者を広げることが課題となっています。また、“2023年度地域課題研究公募”については、7件の申請があり、すべてに地域課題研究費助成金の決定を行いました。

新型コロナウイルスの発生から3年余りが経ちました。政府は、新型コロナウイルスの感染法上の分類を5月8日から、季節性インフルエンザと同じ「5類」に引き下げると決めました。感染者の外出自粛や医療費の負担、マスク着用など、これまでと対策が大きく変わることが考えられます。次年度も、感染防止対策の方法を確認・検討しながら各企画の開催を進めてまいります。

引き続き、皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

看護研究交流センター長 岡村典子

令和4年度看護研究交流センター 活動報告書

目 次

I. 事業実施報告

事業概要	4
事業費	7
事業広報活動	9
公開講座実施報告	11

II. 部門報告

地域社会貢献部門	13
看護職学習支援部門	21
地域課題研究開発部門	29
特別研究部門	33

III. 事務局報告

出前講座	35
------	----

IV. 地域課題研究助成費の報告

2021年度地域課題研究	39
--------------	----

I . 事業実施報告

事業概要

新潟県立看護大学では、大学と地域の交流の場として「看護研究交流センター」を平成 14 年 4 月に開設しました。

大学の建学の精神である「ゆうゆう・くらしづくり」に基づき、大学の教育・研究の成果を地域へ提供し、活動を通じて地域と大学が共に成長していくための橋渡しを担っています。

地域の皆様からの要望をもとに、4 つの部門の活動を柱にして、大学の教職員が情報を発信しています。

I 目的

看護研究交流センターは、看護科学における教育と研究の成果を地域に還元し、県民及び保健医療福祉関係者に対する学術支援ならびに生涯学習・研修支援活動を通して、県内の保健・医療・福祉の向上に貢献することを目的としています。

II 各部門の主な活動内容

1. 地域社会貢献部門【いきいきサロン】【看護大・上教大連携公開講座】

地域の医療者・大学と地域住民の交流会である「いきいきサロン」と「上越教育大学との連携公開講座」を開催し、地域住民への学習の機会を提供している。

2. 看護職学習支援部門【看護職学習支援公開講座】【バーチャルカレッジ】

現職の看護師や潜在看護師のリカレント教育を推進する事業「どこでもカレッジプロジェクト」を主体に、県内の看護職への学び直しの機会を提供している。

3. 地域課題研究開発部門

【地域課題研究公募】【地域課題研究発表会】【上越地域看護研究発表会】

県内の保健・医療・福祉に携わる看護職を対象に本学教員と共同で行う研究を公募し、その成果報告会となる地域課題研究発表会や、上越地域の看護研究の発表の場である上越地域看護研究発表会の開催(上越地域振興局健康福祉環境部と共催)を担っている。

4. 特別研究部門

一般市民の健康の保持・増進や看護職の質的向上の推進の一助として貢献することを目的に、県内の保健医療看護上の課題に対応した研究課題を設定して取組んでいる。

III 事務局

【出前講座】

本学教員の研究成果を地域へ還元する地域貢献活動の一環として実施している。

【卒業生支援】

卒業生支援事業として、相談窓口の開設、小規模会合に対する助成を行っている。

IV 令和4年度 看護研究交流センター構成員

区 分	氏 名	職 名
	センター長 岡 村 典 子	基礎看護学教授
地域社会貢献部門	部門長 山 田 恵 子	小児看護学准教授
	川 島 良 子	基礎看護学講師
	西 川 美 樹	母性看護学講師
	相 澤 達 也	成人看護学助教
	大 倉 由 貴	老年看護学助教
	八 巻 ち ひ ろ	母性看護学助教
	伊 藤 美 由 紀	母性看護学助教
	青 山 拓 夢	老年看護学助教
	小 林 宏 至	小児看護学助手
	山 田 彩 乃	基礎看護学助手
	五十畑麻奈美	母性看護学助手
看護職学習支援部門	部門長 伊 豆 上 智 子	看護管理学教授
	小 林 綾 子	成人看護学講師
	船 山 健 二	精神看護学講師
	野 澤 祥 子	小児看護学助教
	前 川 絵 里 子	地域看護学助教
	上 田 恵	母性看護学助教
	青 山 拓 夢	老年看護学助教
	小 林 宏 至	小児看護学助手
	山 田 彩 乃	基礎看護学助手
地域課題研究開発部門	部門長 原 等 子	老年看護学准教授
	石 原 千 晶	成人看護学講師
	安 達 寛 人	精神看護学講師
	谷 内 田 潤 子	基礎看護学助教
	上 田 恵	母性看護学助教
	早 藤 夕 子	精神看護学助教
	坂 田 智 佳 子	成人看護学助教
	五十畑麻奈美	母性看護学助手

区 分	氏 名	職 名
特別研究部門	部門長 岡 村 典 子	基礎看護学教授
	伊 豆 上 智 子	看護管理学教授
	山 田 恵 子	小児看護学准教授
	原 等 子	老年看護学准教授
	大 竹 順 司	事 務 局 長
	丸 山 紀 子	看護専門職員
センター事務局	丸 山 紀 子	看護専門職員
	水 澤 加 代 子	事 務 職 員
	虎 石 和 代	事 務 職 員

事業費

令和4年度予算配分額 4,803,000 円

I 各部門配分額 (単位：円)

地域社会貢献部門	90,500
看護職学習支援部門	362,000
地域課題研究開発部門	581,000
特別研究部門	200,000
小計	1,233,500

II-1 地域課題研究【2021 年度研究】(前年度繰越) [1.~12.研究代表者 (所属)]

1. 齊藤 千恵子 (厚生連糸魚川総合病院)	52,846
2. 清水 博美 (新発田リハビリテーション病院)	9,143
3. 本田 ひとみ (新潟県立リウマチセンター)	7,984
4. 本山 和樹 (長岡赤十字病院)	62,313
5. 皆川 みどり (長岡赤十字病院)	45,420
6. 赤川 美穂 (長岡赤十字病院)	91,964
7. 石川 真彩 (さいがた医療センター)	22,230
8. 土屋 尚 (新潟労災病院)	15,830
9. 佐藤 予右子 (上越地域医療センター病院)	35,175
10. 水澤 三津江 (新潟労災病院)	40,509
11. 柳澤 絵里奈 (新潟県立中央病院)	23,188
12. 斎藤 真樹子 (総合リハビリテーションセンターみどり病院)	55,892
小計	462,494

II-2 地域課題研究【2022 年度研究】 [1.~6.研究代表者 (所属)]

1. 武田 一久 (医療法人社団渡辺内科医院)	100,000
2. 関 真和 (長岡赤十字病院)	100,000
3. 桑原 香菜子 (長岡赤十字病院)	100,000
4. 米持 純子 (新潟県立中央病院)	99,000
5. 吉村 登紀恵 (新潟労災病院)	100,000
6. 高橋 恵美 (厚生連上越総合病院)	100,000
小計	599,000

Ⅲ その他

事務局管理費	2,508,006
--------	-----------

合計	4,803,000
----	-----------

事業広報活動

I 情報公開

情報公開についての活動は以下のとおりである。

1. 令和3年度看護研究交流センター活動報告書：令和4年4月発行
2. 2022年度看護研究交流センターガイドブック：3,200部
3. 2022年度看護研究交流センター出前講座(パンフレット)：1,500部
4. 看護研究交流センター ホームページ
5. いきいき県民カレッジ：平成26年度より看護研究交流センターの公開講座を登録
(※看護職学習支援公開講座を除く)

II 広報活動

広報誌、新聞、ラジオ等における広報目的の掲載は以下のとおりである。

1. 地域社会貢献部門『看護大・上教大連携公開講座』(9回)

講座名	記事掲載・放送
年間概要	
『看護大・上教大連携公開講座』 長寿の秘訣！ ～健康で豊かに生きる～	上越タイムス(6/7, 6/27, 7/13), 上越 ASA ニュース(6/11), 上越よみうり(6/14, 6/23), 新潟日報(6/19), 新潟日報おはよう通信(6/23), 上越タウンジャーナル(7/4)

2. 地域社会貢献部門『いきいきサロン』(40回)

講座名	記事掲載・放送
年間概要	上越タイムス(4/17),
【第1回】 これならできそう 運動療法 ～糖尿病予防 できることから始めましょう～	有線放送内お知らせ(4/15～), JCV MJ イン フォメーション(4/30～5/13), 新潟日報おは よう通信(4/26), 上越よみうり伝言板 (5/12), 上越タイムス(4/17, 5/3, 5/10, 5/18, 5/24)
【第2回】 大人の発達障害～共に歩む～	有線放送内お知らせ(5/13～), JCV MJ イン フォメーション(6/4～6/10), 上越タイムス (5/10), 上越よみうり(6/14), 上越 ASA ニュ ース(6/15)
【第3回】 “まご” 疲れしていませんか？ ～自分らしくいきいき生きよう～	有線放送内お知らせ(6/10～), JCV MJ イン フォメーション(6/25～7/8), 上越タイムス (6/21, 7/20), 上越 ASA ニュース(6/30, 7/8), 上越よみうり(7/14, 7/19)
【第4回】 見方が変われば世界が変わる～人生 100 年時代に必要な「アハ・モーメント」～	有線放送内お知らせ(8/12～), JCV MJ イン フォメーション(9/3～9/9), 上越よみうり (8/16, 8/18, 8/20), 上越タイムス(8/16), 新 潟日報おはよう通信(8/20),

講座名	記事掲載・放送
	上越 ASA ニュース(8/26)
【第 5 回】 災害に対する家庭での備え	有線放送内お知らせ(9/13～), JCV MJ インフォメーション(10/1～10/14), 上越タイムス(9/20), 新潟日報おはよう通信(9/22)
【第 6 回】 心不全について	有線放送内お知らせ(10/21～), JCV MJ インフォメーション(10/31～11/11), 上越 ASA ニュース(10/14, 10/22), 新潟日報おはよう通信 11/1)

3. 看護職学習支援部門『看護職学習支援公開講座』(2 回)

講座名	記事掲載・放送
年間概要 ①～④の予定	新潟日報(5/8)
年間概要 ⑤～⑦予定	新潟日報(8/14)

4. 地域課題研究開発部門(1 回)

発表会名	記事掲載・放送
2022 年上越地域看護研究発表会 及び 2022 年地域課題研究発表会 (2021 年度研究報告)	新潟日報(8/28)

Ⅲ 記事掲載・放送

新聞、放送等における取材は以下のとおりである。

1. 地域社会貢献部門『看護大・上教大連携公開講座』(1 回)

講座名	記事掲載・放送
『看護大・上教大連携公開講座』 長寿の秘訣！ ～健康で豊かに生きる～	上越タイムス(7/13)

2. 地域社会貢献部門『いきいきサロン』(1 回)

講座名	記事掲載・放送
【第 1～6 回】	
【第 1 回】 これならできそう 運動療法 ～糖尿病予防 できることから始めましょう～	上越タイムス(5/24)

3. 地域課題研究開発部門(1 回)

発表会名	記事掲載・放送
2022 年第 12 回上越地域看護研究発表会 2022 年(2021 年度)研究地域課題研究発表会	上越タイムス(10/2)

令和4年度 看護研究交流センター公開講座実施報告

	日時	講座名	テーマ	参加者数
1	5月19日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	これならできそう 運動療法 ～糖尿病予防 できることから始めましょう～	87
2	5月21日(土) 13:00～16:00	看護職学習支援 公開講座	さあはじめよう看護研究 ①「看護研究のテーマをみつけよう」	21
8	6月11日(土) 13:00～15:00	看護職学習支援 公開講座	さあはじめよう看護研究 ②「文献検索の基本」	23
3	6月16日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	大人の発達障害～共に歩む～	116
4	6月25日(土) 13:00～16:00	看護職学習支援 公開講座	さあはじめよう看護研究 ③「看護研究方法の理解」	20
5	7月9日(土) 13:30～15:30	看護大・上教大 連携公開講座	長寿の秘訣！～健康で豊かに生きる～	83
6	7月21日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	“まご” 疲れしていませんか？ ～自分らしくいきいき生きよう～	49
5	7月23日(土) 13:00～16:00	看護職学習支援 公開講座	さあはじめよう看護研究 ④「研究計画書の書き方」	20
13	9月3日(土) 13:30～15:30	看護職学習支援 公開講座	在宅や福祉施設における感染対策	32
9	9月15日(土) 18:30～19:30	いきいきサロン	見方が変われば世界が変わる ～人生100年時代に必要な「アハ・モーメント」～	78
10	10月 1日(土) 13:00～16:00	研究発表会	2022 第12回 上越地域看護研究発表会 (上越地域振興局健康福祉環境部共催) 2022年度 地域課題研究発表会 (2021年度研究)	74
12	10月20日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	自然災害に対する家庭での備え	68
11	10月29日(土) 13:30～15:30	看護職学習支援 公開講座	退院支援に関わる看護職の看護実践能力向上を目指した院内 教育の取り組み	25
13	11月12日(土) 13:30～15:30	看護職学習支援 公開講座	研究成果を看護実践へ還元する —文献検索のポイント・読み方・活かし方—	22
14	11月17日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	心不全について	87
いきいきサロン 6回				485
看護職学習支援公開講座 7回				163
看護大・上教大連携公開講座 1回				83
研究発表会 1回				74
合計 15回				805

II. 部門報告

地域社会貢献部門

山田恵子、川島良子、西川美樹、相澤達也、大倉由貴（～8月）、八巻ちひろ
小林宏至、山田彩乃、五十畑麻奈美、青山拓夢、伊藤美由紀（9月～）

I 本部門の事業目的

地域社会貢献部門では、地域住民の方々が気軽に大学に足を運び、健康について関心を寄せ、学び合う場を目指す「看護大いきいきサロン」を平成21年度から開催している。また、今年度より、看護大・上教大連携公開講座についても本部門が担当することとなった。

II 事業の概要

1. 「看護大いきいきサロン」開催状況

今年度は、ホールのパーテーションを取り払い、ソーシャルディスタンスに留意して実施した。事前申込制で定員100名として開催し、例年通りの参加者があり、好評価を得ている。また、新たな広報の手段として、事前収録による有線放送、上越ケーブルビジョン（JCV）のPRコーナーの活用を追加した。開催時間はいずれも第3木曜の18:30～19:30であった。

コロナ禍の影響により、昨年度から持ち越された本学の小林綾子先生に第1回の講師をお願いし、第2回から第5回については、本学の教員を主とする内容で構成した。最終回においては、羽尾医院の羽尾先生にご担当いただき盛況の内に全スケジュールを終了した。

令和4年度の参加者数は485人であり、平成21年度から開始して以降、いきいきサロンの総参加者数は7,833人となった。

表1 開催日時およびテーマ・講師と参加人数

回	開催日	テーマ	講師	参加人数
第1回	R4年5月19日 (木)	これならできそう運動療法～糖尿病 予防できることから始めましょう～	新潟県立看護大学 成人看護学 講師 小林 綾子 先生	87
第2回	R4年6月16日 (木)	大人の発達障害 ～共に歩む～	新潟県立看護大学 精神看護学 講師 船山 健二 先生	116
第3回	R4年7月21日 (木)	“まご”疲れしていませんか？ ～自分らしくいきいき生きよう～	新潟県立看護大学 小児看護学 准教授 山田 恵子 先生	46
第4回	R4年9月15日 (木)	見方が変われば世界が変わる ～人生100年時代に必要な 「アハ・モーメント」～	新潟県立看護大学 情報科学 教授 中村 義実 先生	78
第5回	R4年10月20日 (木)	自然災害に対する家庭での備え	新潟県立看護大学 地域看護学 講師 野口 裕子 先生	68
第6回	R4年11月17日 (木)	心不全について	羽尾医院 院長 羽尾 和久 先生	87

2. 参加者のアンケート結果

1)参加者の年代

70 歳代が 176 人(38%)と最も多く、次いで 60 歳代が 110 人(24%)、50 歳代が 78 人(20%)であった。

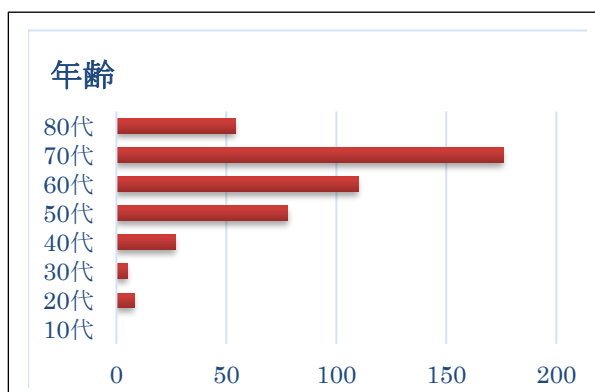


図1 年代

2)これまで参加した回数

これまでに「10 回以上」参加した人が 183 人(40%)と最も多く、次いで「2～3 回」参加した人が 125 人(27%)、「初めて」が 83 人(18%)の順であった。

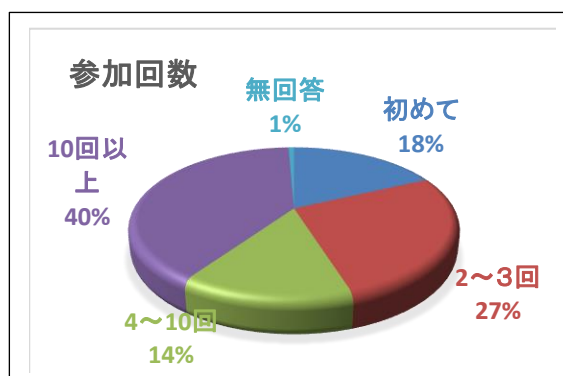
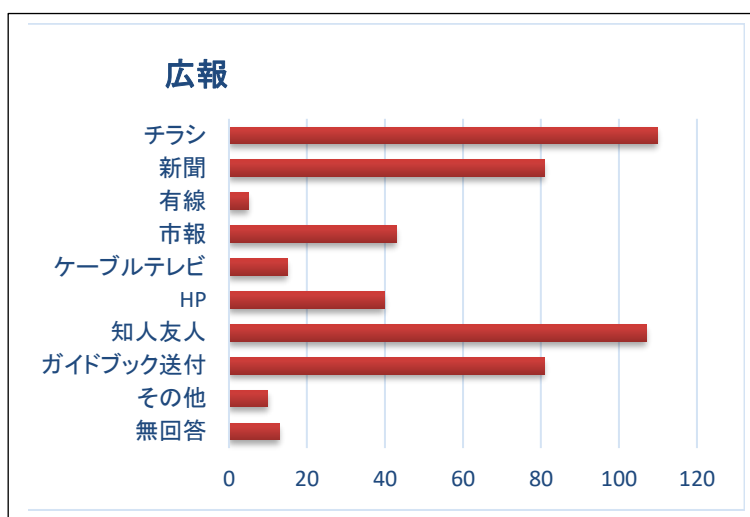


図2 参加回数

3)周知方法（複数回答）

「チラシ」によって参加した人が 110 人（22%）と最も多く、次いで「知人友人」によって参加した人が 107 人(21%)、「ガイドブック」「新聞」とともに 81 人(16%)、「市報」43 人(8.5%)の順であった。今年度から開始した「ケーブルテレビ」は 15 人（3%）であった。



(人)

図3 周知方法（複数回答）

4)参加理由（複数回答）

参加理由では、「テーマに興味・関心があつたから」が 296 人（48%）と最も多く、次いで「毎回参加しているから」が 111 人（18%）、「講師の話が聞きたかったから」が 103 人（17%）、「健康のため」が 99 人（16%）であった。

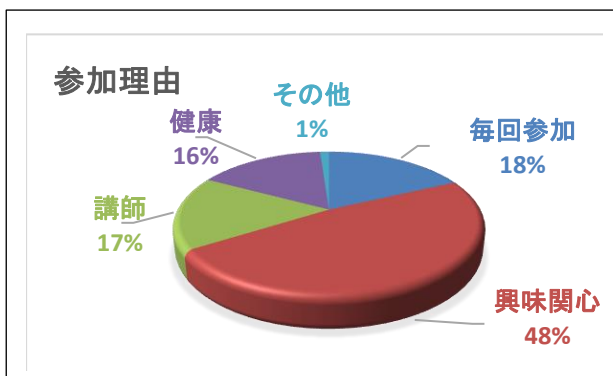


図 4 参加理由（複数回答）

5)講師の話についての感想

全体では、「良かった」と回答した人は 194 人（42%）、「非常に良かった」と回答した人は 183 人（40%）であった。

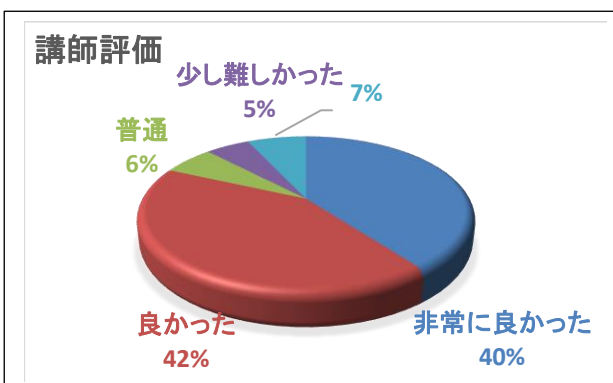


図 5 講師の話についての感想

6)今後、とりあげてほしいテーマ（複数回答）

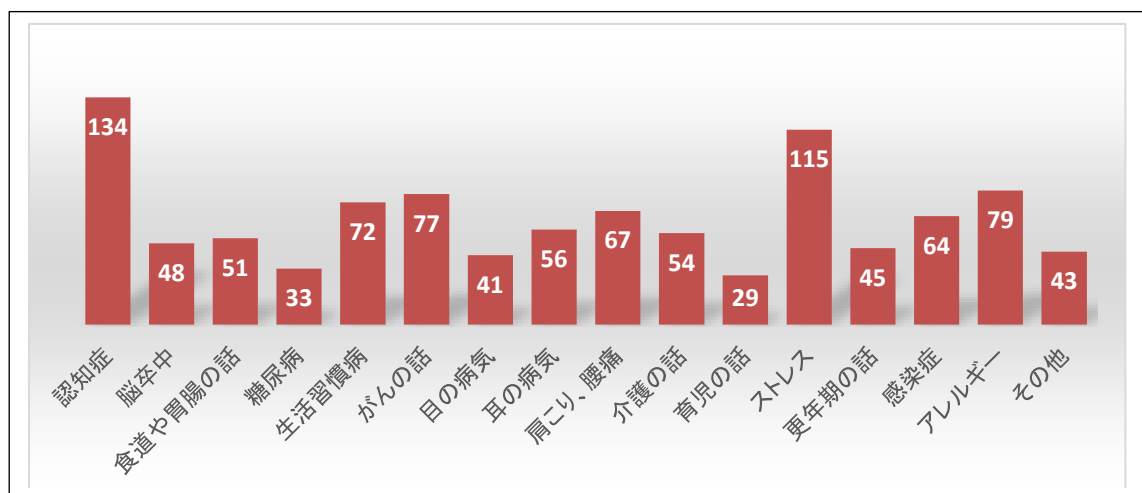


図 6 今後とりあげてほしいテーマ（複数回答）

多かった項目は「認知症」が 134 人（13%）、「ストレス」115 人（11%）、「アレルギー」79 人（8%）、「がんの話」77 人（7.6%）、「生活習慣病」72 人（7%）の順に多かった。その他の自由記載には、様々な分野のテーマがあげられていた。

3. 企画および運営

1) 企画実行メンバー

地域社会貢献部門のメンバー10～11名が企画から運営までを行った。チラシの作成・発送、新聞広告への掲載依頼、講師資料の印刷等は看護研究交流センター事務局が行った。

また、当日の運営では学生アルバイト4名が会場準備や受付・参加者の誘導を行った。

2) 広報活動

看護研究交流センターの案内、リーフレットの発送、看護大いきいきサロン通信の発行(2回)、講座のチラシの作成と配布、大学ホームページでの情報公開、NICかわら版、上越よみうり、上越ASAニュースへの掲載、事前収録による有線放送、上越ケーブルビジョン(JCV)のPRコーナーの活用を行った。

3) 講師謝礼

学外の講師には1回1万円および交通費を支払った。

4) 参加者への対応

新型コロナウイルス感染防止対策として、お茶のサービス廃止、参加定員は100名を上限として事前申込制、第1・第2ホールを開放し座席は十分な間隔をとる、入室前にサーマルカメラによる体温測定、手指消毒・マスク着用の励行、資料やアンケートの配布・回収は混雑を避けるため個々に机上置き、ボールペンの貸し出しは持参していない方のみ、入退室時は混雑しないように誘導する等、具体的な対応を実施した。

また、資料は、昨年同様、看護研究交流センターのロゴマーク入りのクリアファイルに入れて配布した。

本講座は、新潟県の「いきいき県民カレッジ登録講座」に登録されており、スタンプやシールを集めている参加者もある。これまで参加者から求めがあった際には対応していたが、今年度あらためて周知し希望者には手帳の配布を行った。

4. 看護大・上教大連携公開講座

本講座は、看護大学と上越教育大学が、協定に基づき(平成22年7月2日：上越教育大学と新潟県立看護大学との包括的な連携・協力に関する協定)、地域社会に貢献することを目的としてお互いの大学が持つ資源を活用して公開講座を開催する。

今年度は、幹事校である上越教育大学において開催された。テーマは、令和元年から引き続き、「長寿の秘訣！健康で豊かに生きる」とし、上越教育大学から田島弘司先生、池川茂樹先生、新潟県立看護大学から高林知佳子先生、樺澤三奈子先生にご登壇いただいた。

参加者は、83名であり、70歳代が43.1%と最も多く、次いで60歳代、50歳代、30歳代であった。

20歳～30歳代の参加も9.7%と少ないながらも若い方の参加もあった。男女比は、男性36.1%、女性59.7%であった。住居は、上越市が88.9%、妙高市と糸魚川市が9.8%であった。講座の参加理由は、“興味・関心のあるテーマだった”が最も多く、講師の話しは、“非常に良かった”“良かった”が91.7%と満足度の高い結果であった。

5. 令和 4 年度の評価と今後の課題

1) 看護大いきいきサロン

「看護大いきいきサロン」については、令和 4 年度の参加人数は、一昨年度よりも 120 人多い 485 人（平均 81 人/回）であった。その理由として、昨年よりも感染状況が落ち着いたことから、予定の 6 回すべてを実施できたこと、ケーブル TV による情報発信を追加したことなどが考えられた。また、継続して参加している人が多いことから本講座が定着化されていると感じる。今年度は、第 2 回「大人の発達障害 ～共に歩む～」が大変好評であった。大人の発達障害は、メディアなどでも取り上げられていることから当地域においてトピックな内容であり、参加者の方から、どのように関わっていったらよいかなど具体的な質問も出された。また、障害を持つ当事者の方の参加もあり、支援する側だけでなく、される側においても関心の高いテーマであると考えられた。

今後の課題としては、県の「いきいき県民カレッジ登録講座」に登録していることを積極的にアピールしていく。感染症対策については、引き続き対策を続け、周囲の感染状況を見極め開催を決定していく。参加者アンケートを参考に、テーマや講師の検討をしていく。

2) 看護大・上教大連携講座

「看護大・上教大連携講座」については、令和 4 年度の開催は上越教育大学で行われた。開催日時は、R4 年 7 月 9 日(土) 13 : 30～15 : 30（2 時間）であり、コロナ禍による参加者の減少が考えられたが、83 名と概ね良好な参加人数であった。また、50－70 歳代の参加者が多いものの、20 歳代・40 歳代の参加者も 2 割弱あり、中高年層から若者世代の参加も増加していると考えられた。今年度の連携講座には本学の部門員も全員参加し、次年度に向けて上教大の関係者と顔合わせを行った。初参加の部門員がほとんどであったため、講座の進行の仕方や講堂の配置等についても参加することで次年度の参考とすることができた。

次年度のテーマおよび開催方法や講師の選定等について、上教大の担当者とオンライン会議を持ち、以下の内容を決定した。テーマについては、若者世代の参加者が増えていることや同様のテーマを 3 年間継続することなどを鑑み、多様性といった最近の風潮も取り入れた全世代が興味・関心を持てるテーマということで検討し決定した。

令和 5 年度 看護大・上教大連携講座

幹事校 新潟県立看護大学

日程 R5 年 7 月 8 日(土)13 : 30-15 : 30（2 時間）

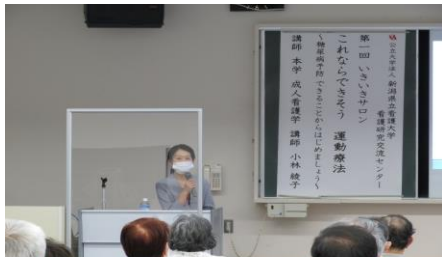
テーマ 「自分らしく、すこやかに生きるコツ」

講師 上越教育大学 池川茂樹 先生

新潟県立看護大学 常磐洋子 先生

新潟県立看護大学 舩山健二 先生

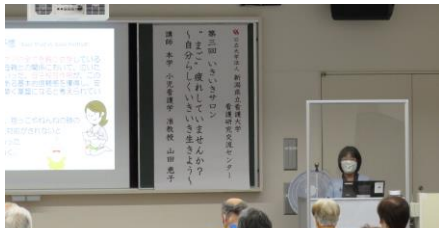
今後の課題としては、次年度は本学が幹事校であるため、資料の作成および印刷、郵送など滞りなく実施していく。担当講師とおよび上教大の関係者と会議を持ち運営を進めていく。



第 1 回



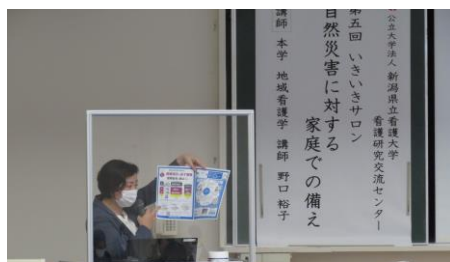
第 2 回



第 3 回



第 4 回



第 5 回



第 6 回

令和 4 年度 いきいきサロンの様子



令和 4 年度 看護大・上教大連携公開講座の様子

看護大いきいきサロン通信



「いきいきサロン」は、健康に関心のある地域の皆様と看護や健康等の専門家との交流の場として、平成 21 年度から開催しています。今回の通信では、第 1 回の開催報告と、今後の予定についてお知らせさせていただきます。

今後も皆様からのご要望や健康に関する世の中の動き等を参考にしながら、いきいきと生活していくことを応援するテーマを準備し、皆様をお待ちしております。

第 13 巻 第 1 号 2022 年 6 月 16 日発行



玄関での検温と手指消毒の様子

感染症予防対策を万全に実施し、安心して受講していただけるよう取り組んでまいります。

第 1 回
5 月 19 日 (木)



「これならできそう運動療法～糖尿病予防できることから始めましょう～」

講師：小林 綾子 先生 (新潟県立看護大学 成人看護学 講師)

2022 年度最初のサロンには、87 名の市民の皆様がご参加くださいました。講義の中では、実際に体を動かしてみる時間もあり、音楽と映像に合わせて、運動を実践されていました。参加された皆様からは、「実際に体を動かす時間があってよかったです」「無理せず少しずつ運動してみたいと思いました」などの声をいただき、大変好評でした。

暑くなりますので、こまめな水分（経口補水液等）補給やちょっとした塩分・糖分補給もどうぞお忘れなく



今後の予定

【いきいきサロン】 本学ホールにて木曜 18:30～19:30 です。事前申し込み制で、参加費は無料です。

日時	講師	テーマ
7/21(木)	小児看護学 准教授 山田 恵子 先生	“まご” 疲れしていませんか？ ～自分らしく いきいき生きよう～
9/15(木)	情報科学 教授 中村 義実 先生	見方が変われば世界が変わる ～人生 100 年時代に必要な「アハ・モーメント」～
10/20(木)	地域看護学 講師 野口 裕子 先生	災害に対する家庭での備え
11/17(木)	羽尾医院 院長 羽尾 和久 先生	心不全について

【看護大・上教大連携公開講座】 会場は上越教育大学です。事前申し込み制で、参加費は無料です。

連携講座	7/9 (日) 13:00～15:30 (申し込み期間 6/8～7/8)	長寿の秘訣！～健康で豊かに生きる～ 新潟県立看護大学 地域看護学 教授 高林 知佳子 成人看護学 准教授 樺澤 三奈子 上越教育大学 学校教育系 教授 田島 弘司 芸術・体育教育学系 准教授 池川 茂樹



「いきいきサロン」は、健康に関心のある地域の皆様と看護や健康等の専門家との交流の場として、平成 21 年度から開催しています。今回の通信では、第 2 回～第 4 回の開催報告と、今後の予定についてお知らせさせていただきます。

今後も皆様からのご要望や健康に関する世の中の動き等を参考にしながら、いきいきと生活していくことを応援するテーマを準備し、皆様をお待ちしております。



玄関での検温と手指消毒の様子
感染症予防対策を万全に実施し、安心して受講していただけるように取り組んでまいります。

第 2 回
6 月 16 日（木）



「大人の発達障害～共に歩む～」

講師：舩山 健二 先生（新潟県立看護大学 精神看護学 講師）

初夏の第 2 回いきいきサロンには、116 名の市民の皆様がご参加くださいました。参加された方々にとって興味深い内容であり、熱心に聴講されている姿が見られました。参加された皆様からは、「面白かった、素晴らしかった」「発達障害を理解するいい機会となった」「もう少し話を聞きたい」などの感想をいただきました。皆様、素敵な感想をありがとうございました。

第 3 回
7 月 21 日（木）



「“まご” 疲れしていませんか？～自分らしく いきいき生きよう～」

講師：山田 恵子 先生（新潟県立看護大学 小児看護学 准教授）

夏の夜の第 3 回いきいきサロンには、46 名の市民の皆様にも感染症対策にご協力をいただき、アットホームな雰囲気の中で無事開催することが出来ました。参加された皆様からは、「今後の孫たちとの関わりについて非常に参考になりました」「老年期に入り、今後の自分の生き方のキッカケをつかめたような気がします」「頑張らずに、頑張らない、“丁度いい加減” のところで生きることが目標としていきたいと思います！」などのご感想をいただきました。皆様、ありがとうございました。

第 4 回
9 月 15 日（木）



「見方が変われば世界が変わる～人生 100 年時代に必要な「アハ・モーメント」～」

講師：中村 義実 先生（新潟県立看護大学 情報科学 教授）

鈴虫の音が聞かれ始めた第 4 回いきいきサロンには、78 名の市民の皆様がご参加くださり、皆様一様に先生のお話に引き込まれていました。参加された皆様からは、「心の中でお～なるほどとか、面白い！と目からウロコの感じで、一生懸命聞きながらの一時間でした。」「この世界が変わったように思います。」「思考」の考え方が増えた。子供の頃を思い出して分析してみようと思った。」などのご感想をいただきました。皆様、ありがとうございました。

【今後のいきいきサロン】 事前申し込み制、参加費は無料です。

日 時	場 所	講 師	テーマ
11 月 17 日(木) 18:30～19:30	本学 ホール	羽尾医院 院長 羽尾 和久 先生	心不全について

看護職学習支援部門

伊豆上智子、小林綾子、舩山健二、野澤祥子、
前川絵里子、上田恵、青山拓夢、小林宏至、山田彩乃

I 本部門の事業目的

新潟県内、特に上越地域の現職の看護師や潜在看護師の資質向上を目指し、様々な学習および研修の機会を提供する。このことにより看護職の資質向上をはかり、県民のヘルスケアの充実を目指す。

II 2022年度の事業概要

本部門では、公開講座とバーチャルカレッジの2つの活動を通して、現職の看護師や潜在看護師のリカレント教育を推進する事業「どこでもカレッジプロジェクト」を実施している。今年度は、看護職向け公開講座の開催（7回）、どこカレ通信の発行（2回）、バーチャルカレッジの運営を行った。以下に、事業の詳細を記す。

1. 看護職学習支援公開講座

新型コロナウイルス感染症の影響を受けにくい開催方法を採用し、昨年度と同様に Web 会議システム Zoom を使用したオンライン講義をライブ配信して全講座を開催した（表1参照）。各講座の運営担当者は、昨年度の公開講座用に整えた運営マニュアルを使用して対応した。一部の講師から「講座の進行や Web 会議システム使用の事前説明が十分でなく戸惑った」との声があり、各講師の準備状況を把握して対応するよう努めた。受講者には講座学習資料とともに Web 会議システム Zoom の使用手順を示した資料を送付し、講座当日の電話対応窓口を整えた。全7回を通じて公開講座実施に影響する運営側の通信障害はなかったが、学内の情報演習室から Web 会議システムを使用した際、近接したマイクを同時接続したために鳴音（ハウリング）が発生した。当日はマイクのスイッチ操作に留意して再発防止に努めたが、講師や運営担当者が同じ室内で Web 会議システムに接続する場合は、マイクが近接しない距離を保つ工夫が必要である。他に、受講者アンケートには「講師の音声途切れる」「音量が小さい」「不規則な早口に聞こえる」「画面上の講師の動作が不規則に静止する」といった回答が寄せられたが、講座の進行に大きな影響はなかった。

今年度の公開講座は、看護現場に活かすコースを再開し、看護研究支援コースとの2コース7講座で構成した。看護研究支援コースは、過年度に実施した「文献検索の基本」を再開し、本学の石原千晶先生、図書館司書の飯田孝枝氏と石野愛美氏に担当していただいた。文献データベースの操作演習はできなかったが、受講者から「最新の情報がわかった」、「ポイントがわかったので早速検索してみたい」の声が寄せられた。昨年度に引き続き本学の石田和子先生に担当していただいた「看護研究のテーマをみつけよう」、「看護研究方法の理解」、「研究計画書の書き方」の3講座は、受講者から「わかりやすい説明で研究への意欲が高まった」、「研究活動の流れが明確になった」、「実際の研究の具体例が多く理解しやすい」「期待していた内容が学べた」との感想が寄せられた。看護現場に活かす3講座は、看護職の関心が集まるテーマや日常の実践に活用しやすい内容を選出し、県内の看護実践を牽引する方々を講師に迎えた。「在宅や福祉施設における感染対策」は、国立病院機

構さいがた医療センター感染管理認定看護師の浦沢昌恵氏、認知症看護認定看護師の保科三千代氏を講師に迎えた。受講者から「感染対策の基本がわかった」「介護施設利用者向けの感染予防策がよくわかった」「日常のケアに役立つ」との声があった。「退院支援に関わる看護職の看護実践能力向上を目指した院内教育の取り組み」は、県立がんセンター新潟病院前看護部長の池田良美氏と副看護師長の吉田志穂氏、新潟南病院看護部長の坂井八十子氏を講師に迎えた。受講者から「退院支援の流れが理解できた」「退院支援の現状や課題がわかり、実際の取り組みが参考になった」「施設内外の多職種との連携や組織体制整備の必要性がわかった」との声が寄せられた。「研究成果を看護実践へ還元する 一文献検索のポイント・読み方・活かし方」は、本学の舩山健二先生と図書館司書の飯田孝枝氏に担当していただいた。一部の受講者から「実際の検索演習があればよかった」の声はあったが、「要点がまとめられており、わかりやすかった」、「文献検索方法が具体的に理解でき、参加してよかった」と概ね好評だった。

昨年度に引き続き、公開講座受講者を対象に Google フォームによる無記名の Web アンケートを実施した。各講座終了時に受講者アンケートについて説明して協力を依頼し、アンケートフォームの URL を提示して回答を求めた。回答率は 48~88%で、受講講座の満足度は総じて高かった。延べ受講者数 163 名に対して 114 件の回答(回答率 70%)となった背景には、職場等から 1 台の情報端末を使用して複数の受講者が参加した場合に、アンケートの回答が 1 件の入力となった可能性が考えられる。次年度も同様の方法で Web アンケートを実施し、より多くの受講者の協力が得られるように協力依頼を継続する。

今年度も Web 会議システムを利用して全講座を開催し、演習を伴う学習内容に制限が生じるものの、受講者の期待に応える内容が提供できた。Web 会議システムに接続できれば好きな場所で学べる利便性は、初めて参加する受講者にも好評で、看護職のリカレント教育を推進することができた。次年度も全ての公開講座をオンライン開催で行うこととし、看護実践に活用できる内容の学習機会を継続して提供できるように取り組む。

表 1. 看護職学習支援公開講座開催実績

区分	講座名	開催日	受講者数	金額	講師(敬称略)
看護研究支援 4コース	さあはじめよう看護研究① 「看護研究のテーマをみつけよう」	5月21日(土) 13:00~16:00	21	1,000 円	新潟県立看護大学 教授 石田和子
	さあはじめよう看護研究② 「文献検索の基本」	6月11日(土) 13:00~15:00	23	1,000 円	新潟県立看護大学 講師 石原千晶 図書館司書 飯田孝枝 同 石野愛美
	さあはじめよう看護研究③ 「看護研究方法の理解」	6月25日(土) 13:00~16:00	20	1,000 円	新潟県立看護大学 教授 石田和子
	さあはじめよう看護研究④ 「研究計画書の書き方」	7月23日(土) 13:00~16:00	20	1,000 円	新潟県立看護大学 教授 石田和子
かす 3 コ ー ス 看護実践に活	在宅や福祉施設における感染対策	9月3日(土) 13:30~15:30	32	1,000 円	さいがた医療センター 感染管理認定看護師 浦沢昌恵 認知症看護認定看護師 保科三千代

退院支援に関わる看護職の看護実践能力向上を目指した院内教育の取り組み	10月29日 (土) 13:30～15:30	25	1,000 円	県立がんセンター新潟病院 前看護部長 池田良美 副看護師長 吉田志穂 新潟南病院 看護部長 坂井八十子
研究成果を看護実践へ還元する ー文献検索のポイント・読み方・活かし方ー	11月12日 (土) 13:30～15:30	22	1,000 円	新潟県立看護大学 講師 船山健二 図書館司書 飯田孝枝

2. どこカレ通信

どこカレ通信は、「どこでもカレッジプロジェクト」のメイト（「どこでもカレッジプロジェクト」でともに学習する看護職の方々の呼称で、所定の申請書の提出により登録された会員）に向けて、公開講座やバーチャルカレッジを周知する目的で発行している。

看護職学習支援公開講座の開催に併せて年 2～3 回発行しており、今年度は公開講座数を考慮して年 2 回の発行とした。主な内容は、公開講座の実施状況の紹介と開催案内を中心に、地域課題研究の公募や研究発表会の案内、バーチャルカレッジの紹介、メイト登録の案内等を掲載した。どこカレ通信の発行実績の詳細は表 2 に示した。50 号（資料 1 参照）は、県内看護職が就業する 817 施設とメイト 109 名宛に、51 号（資料 2 参照）はメイト 133 名宛にそれぞれ送付した。どこカレ通信は紙面発行のほか、本学リポジトリに収載して本学ホームページで公開している。

表 2 どこカレ通信発行実績一覧

号名	発行時期	送付部数	主な内容
50	8 月	926	公開講座の開催案内と終了報告、地域課題研究の申請案内と地域課題研究発表会の案内、メイト募集の案内
51	12 月	133	公開講座の終了報告、地域課題研究申請者の声紹介、バーチャルカレッジ新教材掲載の案内

3. バーチャルカレッジ

今年度の公開講座一覧に、昨年度追加した看護研究支援コース「わかりやすいプレゼンテーション」の VOD 教材を加えて案内した。また、今年度の公開講座から、看護研究支援コース「文献検索の基本」、看護現場に活かすコース「退院支援に関わる看護職の看護実践能力向上を目指した院内教育の取り組み」、「研究成果を看護実践へ還元する ー文献検索のポイント・読み方・活かし方ー」の動画教材を作成した。動画教材化した公開講座は、講師に協力依頼して承諾を得た後、受講者にも動画教材化の目的で録画する旨を説明して協力を得た。

2022 年度の公開講座受講者（延べ 163 人）のアンケート結果によると、バーチャルカレッジ利用状況の設問に回答した 64 名のうち、「よく利用している」1 名（2%）、「たまに利用している」17 名（27%）で、「見たことがない」46 名（72%）であった。昨年度の同設問に回答した 41 名では「たまに利用している」7 名（17%）、「見たことがない」33 名（80%）であり、回答者に占めるバーチャルカレッジ利用率はやや増加した。次年度もバーチャルカレッジに収載する動画教材の作成と、利用を促す活動を継続する。

4. その他

1) メイト獲得に向けた取り組み

公開講座参加者にメイト募集を案内して周知を図った。今年度のメイト新規登録は 26 名、2023 年 1 月末時点の登録数は 134 名である。メイト登録はバーチャルカレッジ利用に必要な手続きであり、情報システムの管理上、2 年ごとの更新制で運営している。更新年度を迎えた 84 名に更新案内を送付したが、2023 年 1 月末時点の更新数は 7 名である。次年度は、公開講座開催時のメイト募集案内と看護職学習支援公開講座のメイト先行申込特典を継続し、メイト登録数の増加に向けて取り組む。

2) 広報活動

看護研究交流センター案内（ガイドブック）の発送、本学ホームページへの公開講座開催案内の掲載、病院や施設へのチラシの送付など、積極的に情報を公開した。公開講座開催時には、受講者に向けてバーチャルカレッジとメイト登録の案内、次の公開講座の紹介を行い、公開講座終了後の受講者アンケートにも設問を設定した。

3) 卒業生や修了生の学習ニーズ把握

本学卒業生と大学院修了生の学習ニーズ把握の目的で、無記名の Web アンケートを実施した。卒業生への調査協力依頼は、同窓会を通じて卒業年度ごとの同窓会担当者にアンケートフォームの URL を示した電子メールを送信して、卒業生への協力依頼の呼びかけを依頼した（呼びかけ方法は各同窓会担当者に一任し、呼びかけた人数は集計していない）。修了生への調査協力依頼は、修了生ネットワークを通じて修了生 33 名にアンケートフォームの URL を示した電子メールを送信した。調査協力依頼は 2022 年 11 月に送信し、Web アンケートの回答は 11 月 30 日締切とした。

卒業生および修了生から 38 件の回答が寄せられ、希望する講座や研修会の内容として、看護ケア（がん看護、緩和ケア、終末期ケア、褥瘡管理、嚥下機能訓練、認知症、BLS）、看護師教育、労務管理、災害対応、一般教養、キャリア支援が挙げられた。



どこカレ通信 | 第 50 号 2022. 8 発行

【新潟県立看護大学看護研究交流センター】 e-mail nirin@niigata-cn.ac.jp
TEL 025-526-2822

看護職学習支援公開講座

9 月から看護現場に活かす 3 コースが始まります！

参加しやすいリモート（Zoom）開催です。
毎日の業務に役立つ内容です！

9 月 3 日（土） 13:30～15:30

在宅や福祉施設における感染対策（対象：看護職＆介護職）

【講師】 国立病院機構さいがた医療センター 感染管理認定看護師 浦 沢 昌 恵
認知症看護認定看護師 保科三千代

10 月 29 日（土） 13:30～15:30

退院支援に関わる看護職の看護実践能力向上を目指した院内教育の取り組み

【講師】 県立がんセンター新潟病院
前看護部長 池田 良美
患者サポートセンター 副看護部長 吉田 志穂
新潟南病院 看護部長 坂井八十子

11 月 12 日（土） 13:30～15:30

研究成果を看護実践へ還元する
-文献検索のポイント・読み方・活かし方-

【講師】 新潟県立看護大学
講 師 船山 健二
図書館司書 飯田 孝枝



看護研究支援コースが終了！

【看護研究支援コース：さあはじめよう看護研究4コース】

第1回	「看護研究のテーマをみつけよう」	講師：本学 教授	石田和子
第2回	「文献検索の基本」	講師：本学 講師	石原千品
		図書館司書	飯田孝枝・石野愛美
第3回	「看護研究方法の理解」	講師：本学 教授	石田和子
第4回	「研究計画書の書き方」	講師：本学 教授	石田和子

参加状況

- ・参加者数は、各回 20 名から 23 名だった。
- ・全コース参加 7 名、3 回参加 7 名、2 回参加 3 名と、継続して参加された方が多かった。
- ・毎回の参加者の約 6 割を 40～49 歳が占めており、次に多い年代は、第 1 回は 30～39 歳、2 回目以降は 50 歳から 59 歳だった。20 代・30 代の参加は少なかった。
- ・新潟市からの参加が最も多く、各回とも県内全域からまんべんなく 1～2 名が参加されていた。
- ・参加者アンケートの結果、講義について「非常に良かった」と「良かった」の回答が 8 割あった。
- ・看護研究交流センターのバーチャルカレッジについて知っている人は、各回とも数名だった。

参加者の声

- ・現場の状況を踏まえた講義内容はわかりやすく、研究にとりかかってみたいと感じる刺激をもらった。
- ・教科書では理解できない言葉の意味を解説いただき、ハードルが高かった看護研究の壁が崩れてきている。
- ・看護研究の経験は無いがフォローする立場になり受講することに決めた。苦手意識があった研究に興味が出てきた。
- ・病院で指導してくれる人がいなく、看護研究に取り組むことが無くなっていた。交流センターを活用しようと思う。
- ・自分が行っていた文献検索方法は無駄が多いことに気づいた。
- ・文献のサイト活用の注意点など、知らないことがわかり興味が増した。
- ・自宅にいながら、大学の先生に学ぶことができありがたい。受講料も安く、もっと多くの人が参加すればいいのにと思う。

看護研究に興味を持ち、取り組んでみようと思われた方に**地域課題研究への申請**をお薦めします。



応募期間：2022 年 9 月 1 日（木）～11 月 30 日（水）

研究期間：2023 年 4 月 1 日～2024 年 9 月末（研究発表会は 2024 年 9 月～10 月の予定）

研究助成費：1 件あたり 10 万円を上限 ※研究助成額は採択後に決定します

応募方法：応募期間内に、「研究の動機」（指定用紙）を記載し、提出する

応募したら：その 1・・・一緒に研究を行う本学の教員を決定する（指名も可能）

その 2・・・決定した教員と共に「研究の動機」を基に「研究計画書」を作成する

その 3・・・研究計画書を提出（本申請）して採択が決定する

★**地域課題研究発表会が、10 月 1 日（土）13:00 から開催されます。**（Zoom 参加可）。是非ご参加ください。

★パソコンかスマホ、インターネットに接続できる環境があればいつでも・どこでも学習できる**“どこカレメイト”**を募集しています。詳しくは下記の Web サイトをご覧ください。いずれかの問い合わせ先におたずねください。



Web サイト:

<https://www.nirin.jp/>



連絡先:

025-526-2822



メール アドレス:

nirin@niiigata-cn.ac.jp



新潟県立看護大学看護研究交流センター

e-mail nirin@nigata-cn.ac.jp

TEL 025-526-2822

どこカレ通信

51号

2022. 12 発行

【今回の話題】

1.「看護現場に活かすコース」が全て終了しました

2.「看護研究支援コース」の受講者が2023年度地域課題研究に複数挑戦します

3.どこカレに新しい動画教材を追加しました

1. 「看護現場に活かすコース」研修を終えて

9 / 3 在宅や福祉施設における感染対策

今回は、在宅や福祉施設など療養の場における感染管理に視点を置き、講師を感染管理分野と認知症看護分野の認定看護師に担当していただきました。現場の実例に沿った話題が盛り込まれ、写真も豊富に使われていました。身の回りにある材料を使い感染防護具を作る実技では、受講された方々の真剣に参加する様子が画面上からも伝わってきました。感染管理の基本を再確認する貴重な研修になりました。

10/29 退院支援に関わる看護職の看護実践能力向上を目指した院内教育の取り組み

少子高齢化による 2025 年問題や地域包括ケアシステムの構築に向け、看護職の退院支援調整能力の向上が求められていることから、その能力向上を目指す院内教育の取り組みを学ぶ機会として企画しました。組織やシステムが異なる講師 3 名の講義を通じて、『所属する施設の退院支援を、より現場に即したものにすることを』というアンケートを多くいただきました。

11/12 研究成果を看護実践へ還元する一文献検索のポイント・読み方・活かし方

論文として公開されている看護研究の成果を、看護現場の課題解決に活用することを目的に企画しました。2 名の講師から、信頼できる文献、文献の種類、キーワード選定、検索の仕方、図書館の活用方法等についてわかり易い説明がありました。『研究の目的で文献を利用していたが、日頃の看護の疑問を解決するために研究成果を活用する視点に気づかされた。文献検索が身近になった。』という感想が寄せられました。

2. 研修の受講お疲れ様でした。 そして 2023 年度地域課題研究への 申請、ありがとうございます。

今年度の公開講座を複数回受講された 2 名の方が、研究申請への思いを伝えて下さいました。

Nさん「地域課題研究に挑戦しようと思いながら公開講座を受講していました。自分自身にとって研究は本当に難しく苦手意識がありました。在宅看護 CNS としての役割でも研究は重要であり指導を受けたいと思っていたので、勇気を出して申し込みました」

Yさん「疑問がいつも沢山ある私です。疑問は研究の出発点と聞き、成功例でも失敗例でも振り返りから、最初は真似からスタートでよし！の言葉が励みになりました。文献活用も学んだら、やってみようかなと思えてきました」

3. どこカレメイトの学習を支援 するバーチャルカレッジのお知らせ 新しい教材を 5 本掲載しました。

自宅学習の一つとして、是非ログインして下さい。

※「看護現場に活かすコース」の公開講座
退院支援に関わる看護職の看護実践能力向上
を目指した院内教育の取り組みより 3 本

※「看護現場に活かすコース」の公開講座
研究成果を看護実践へ還元する一文献検索の
ポイント・読み方・活かし方より 2 本

★1 本ずつ視聴できます。

★視聴に要する時間は 15 分から 50 分弱です。

*** 自宅から Zoom で簡単に参加でき、受講料もお手頃！研修参加をお待ちしています。🌈🌈🌈

地域課題研究開発部門

原等子、石原千晶、安達寛人、谷内田潤子、上田恵、坂田智佳子、早藤夕子

I 本部門の事業目的

新潟県の保健・医療・福祉分野で働く看護職の実践現場における研究活動を支援することを通して、新潟県の看護の質向上をめざす。

II 活動状況

1. 県内の看護研究の取り組み支援

1) 地域課題研究推進

地域課題研究は、新型コロナウイルス感染症の影響が長期にわたり研究活動の実施が困難な中でも工夫して取り組まれている。感染蔓延下でも、現場のケアの質向上のために看護研究を行うことの必要性が再認識されてきている状況がある。その中で 2022 年度においても地域課題に取り組む看護職の支援を行った。

2022 年度の助成は 6 件で、2021 年度の 12 件から減少した。現場での感染対策の長期化、慢性的人手不足などの影響で看護研究にかける余力が乏しいことがうかがえる。

2022 年 9 月には、2021 年度分 10 件の研究報告が本学教員の支援を受けて提出され、地域課題研究発表会で口頭発表を行った。2021 年度分の 2 件は、コロナ禍の影響を受けたため研究が進められず、研究期間を 1 年間延長する申請がされた。

2023 年度の地域課題研究の公募については、2022 年 9 月 1 日（木）から 11 月 30 日（水）で行い 7 件の応募があった。

2) 地域課題研究発表会の開催

2022 年 10 月 1 日（土）に 2021 年度助成分の地域課題研究発表会を開催した。感染状況の不安定さが続く中で参加者からの希望もあり、今年度もハイブリッド（オンラインと対面の併用形式）で実施した。また、昨年度同様に上越地域看護研究発表会を併催した。同会場において両方の研究を交互に発表する形式とし、どちらの発表会も参加できるようにした。

2. 上越地域看護研究発表会（地域課題研究発表会の開催との併催）の開催

上越地域看護研究発表会実行委員会は、上越地域振興局健康福祉環境部との共催の下、上越地域の 7 病院の看護職により構成され、会議を 6 月 29 日、7 月 27 日、11 月 16 日に実施した。上越地域看護研究発表会は 7 件の応募があり、地域課題研究開発部門員が査読を行い、修正後の再提出を経て抄録集を作成、10 月 1 日（土）の発表会において口頭発表された。

ハイブリッドでの開催は、主催側、発表者、参加者ともに機器の操作が必要であり、マニュアルを作成したうえで発表会前週の夕方に操作の練習会を実施した。しかし、本番でも支障が見られたことから、スムーズに実施するために専用の機器が必要であることを確認した。また、事後の閲覧

ができるよう発表の録画画像（アーカイブ）を作成し、どこでもカレッジ（どこカレ）で期間を限定して公開した。

発表会の会場参加は 74 名、オンライン参加は 28 件であった。約 3 週間のアーカイブの視聴件数は 17 演題で 250 件であった。

参加者アンケート（26 件回収）から参加動機として「研究取り組みの参考にしたい」が 11 件 42.3%であった。上越地域看護研究発表会との併催は「適切だった」23 名 88.5%で、参加方法は「適切だった」25 名 96.2%であった。改善・工夫の必要性についての自由意見は、「すべての発表が聴きたかった」「2 会場あるため聴講したいところを聞くことができなかった」「事前に資料に目を通せると質問しやすい」であった。また、「遠方の参加者に配慮しオンラインの併用がよい」23 名 88.5%、「会場での対面発表がよい」3 名 11.5%で、「対面の方が意見交換，質疑応答がしやすいと思うが、参加のしやすさとしてハイブリッドのメリットは大きい」「オンライン併用がいいが、発表者はスムーズな進行のため現地発表がよいと思う」という意見があった。実行委員からは、ハイブリッド開催を継続する場合、原則発表者は現地集合がよいという意見が多かった。

運営としては、発表者への周知連絡を円滑にするために、どこカレメイト登録を勧め、参加者にはどこカレメイトの一時アカウントを発行した。その登録作業等の煩雑さから困難さがあったという意見もあったが、アーカイブの公開は限定的であるべきと合意を得て、今後に関してもどこカレを活用していくことが検討された。また、ハイブリッド開催の機器操作の不手際等が多かったことから、スムーズな会の運営のための仕組み・機器の購入について検討していくことが課題として挙げられた。

Ⅲ. 事業の評価と今後の課題

新潟県、特に上越地域の看護の質向上に寄与する本事業の意義は大きい。2 つの合同研究発表会のハイブリッド併催、アーカイブ視聴の実施は、感染流行下だけでなく平時においても多忙な看護師の参加を促し、新潟県の下方に位置する本学の特性を踏まえても有意義である。今後、交流センターの活動にこれらの方法が定着していく可能性は高く、オンライン環境の整備とともに利便性を向上させていくことが重要である。



2022 年 10 月 1 日 発表会閉会式後 オンライン参加者を交えて記念撮影

第12回上越地域看護研究発表会

2022年地域課題研究発表会（2021年度研究報告）

合同発表会プログラム

令和4年10月1日（土） 13:00～16:00 （開場 12:30）

会場：県立看護大学第1・第2ホール（会場参加 & オンライン参加）

主催：新潟県上越地域振興局健康福祉環境部・新潟県立看護大学看護研究交流センター

第1ホール	第2ホール
12:30 開場、Zoom参加者入室可	
13:00 開会式：上越地域振興局健康福祉環境部部長・新潟県立看護大学学長あいさつ（第2ホール）	
（会場移動）	
演題発表【A-1群：上越地域看護研究】 13:15～13:55 座長：桑原和子（さいがた医療センター） 演題1 渡邊佳絵（上越総合病院） COVID-19感染症患者の心理から見えた看護の課題 ～アンケート調査を実施して～ 演題2 田村朋裕（川室記念病院） 実践報告：便秘改善に向けた乳果オリゴ糖の効果 ～長期間行動制限している患者事例を通して～ 演題3 渡邊裕子（知命堂病院） 実践報告：療養病棟における固定チームナーシング導 入による看護師の意識の変化	演題発表【B-1群：地域課題研究】 13:15～14:15 座長：酒井禎子（新潟県立看護大学） 演題1 齊藤千恵子（糸魚川総合病院） A病棟の新人看護師が経験したリアリティショックとそ れを乗り越えた要因 演題2 清水博美（新発田リハビリテーション病院） 多職種協働で立ち上げた認知症ケア委員会の取り組み 演題3 本山和樹（長岡赤十字病院） 虚血性心疾患を併発した糖尿病患者の療養生活への思い 演題4 斎藤真樹子 （総合リハビリテーションセンターみどり病院） 人生最終段階と説明を受けた患者の家族などの代理決定 者の葛藤 演題5 佐藤予右子 （前：上越地域医療センター病院 現：日本医療大学） 高齢患者の終末期における治療と人工栄養に関する意思 決定支援の現状と課題―地域包括ケア病棟に勤務する看 護師に焦点を当てて―
お知らせ・休憩 20分 （13:55～14:15）	
演題発表【B-2群：地域課題研究】 14:15～15:15 座長：樺澤三奈子（新潟県立看護大学） 演題6 赤川美穂（長岡赤十字病院） 臓器提供時の各段階における必要な看護ケア ～ご家族への看護を振り返って～ 演題7 柳澤絵里奈（県立中央病院） 三次救急を担うA病院におけるがん放射線療法看護の 現状 演題8 本田ひとみ（県立リウマチセンター） 関節リウマチ患者における手の洗い残し調査 演題9 土屋 尚（新潟労災病院） 整形外科患者の就労支援に対するニーズ 演題10 水澤三津江（新潟労災病院） 当院の退院支援の評価から見えた課題 ―退院支援評価表を分析して―	お知らせ・休憩 15分 （14:15～14:30） 演題発表【A-2群：上越地域看護研究】 14:30～15:15 座長：安達寛人（新潟県立看護大学） 演題4 倉石多恵子（さいがた医療センター） 強度行動障害のある患者に対して物理的・視覚的構造化を 用いた排便行動への介入事例 演題5 武田織枝（県立中央病院） 実践報告：A病院における糖尿病透析予防管理支援の成果 演題6 早川浩生（さいがた医療センター） 活動性亢進の症状のある認知症患者への環境調整の効果 ―認知症プログラムへの継続的な参加を目指して― 演題7 田地枝里（さいがた医療センター） 実践報告：A病院におけるクロザピン治療の活動報告 ―地域から全国へ―
15:20 閉会式：看護研究交流センター長あいさつ・写真撮影（第2ホール）	

発表会の様子(上越タイムス)



2022 年度地域課題研究

No.	申請代表者	テーマ	所属	学内責任者 共同研究者
1	武田一久	A地域の入居型介護施設における透析患者の入所に関する現状と課題 ―介護施設の職種に焦点を当てて―	医療社団法人 渡辺内科医院	東條 紀子
2	関 真和	身体抑制の低減に向けた実践 ―看護師の年代別インタビューによる課題分析を踏まえた介入をととして―	長岡赤十字病院	原 等子
3	桑原香菜子	在宅酸素療法を受ける患者の医療機器関連圧迫創(MDRPU)に対する認識と対処の実態	長岡赤十字病院	石岡 幸恵
4	米持 純子	当院のコロナ専用病棟に勤務する看護師の身体的・精神的影響に関する実態調査	新潟県立中央病院	岡村 典子
5	吉村登紀恵	A病院壮年期女性看護師の骨密度と骨粗鬆症の知識に関する実態調査	新潟労災病院	酒井 禎子
6	高橋 恵美	確認不足によるインシデントの分析と対策	厚生連上越総合病院	伊豆上智子

2023 年度地域課題研究

No.	申請代表者	テーマ	所属	学内共同 研究者
1	大澤 寿子	看護師の退院支援モデル活用の効果と課題 ～退院支援モデルを活用した教育的プロセスの効果について～	新潟県立柿崎病院	関 睦美
2	佐藤 七重	神経難病療養者を担当する介護支援専門員が訪問看護師に期待すること	豊栄病院豊栄訪問 看護ステーション	前川 絵里子 高林知佳子
3	志賀 木綿子	認知症者が医療に結び付かない理由とその特徴 ―認知症初期集中支援チームの活動を通して早期受領行動に結び付ける対応を考える―	総合リハビリテー ションセンター みどり病院	原 等子
4	瀧澤 いずみ	A県内の病院に勤務する看護師の臨床における看護研究活動の課題と効果的な支援の検討	新潟信愛病院	山岸 美奈子
5	外川 友子	A病院救急病棟看護師の臨床看護実践の状況における携帯用擦式アルコール消毒薬による手指衛生の認識	長岡赤十字病院	相澤 達也
6	箕輪 明美	乳房再建手術における前頸部皮膚障害予防への取り組み ～統一された看護を実施するために～	長岡赤十字病院	石原 千晶
7	柳澤 美直代	認知症対応型共同生活介護における医師不在時ICTを活用した遠隔看取りの実態	藤田企画グループ ホーム癒しの家	東條 紀子

特別研究部門

岡村典子、伊豆上智子、原等子、山田恵子、丸山紀子、大竹順司

I 本部門の事業目的

新潟県内の保健医療看護上の課題に対応した研究課題を設定して取組み、一般市民の健康の保持・増進や看護職の質的向上の推進の一助として貢献することである。

II 2022年度の事業概要

今年度は、まず研究課題の設定に向け、部門員の意見とともに小泉学長の意見もお聞きしながら検討を行った。その際、部門長の意見として、看護研究交流センターの地域課題研究開発部門、看護職学習支援部門が約10年以上取り組んでいる「看護研究への支援」について、着目していることをお伝えした。地域課題研究開発部門においては、地域の看護実践上の問題や課題解決に向けた看護研究への取り組みを推進する目的にて研究費の助成も行っている。しかし、新型コロナウイルス感染症による影響はあるものの、研究の応募が目標の10題に満たない状況にある。また、看護職学習支援部門においては、研修後アンケートで要望が多い看護研究に関する公開講座を継続しているが、受講後どのように学習成果が発揮されているか不透明な状況にある。これら2部門の背景を踏まえ、看護研究交流センターが支援対象とする新潟県内の病院施設における看護研究実施状況、及び支援体制を明らかにし、今後の研究推進のあり方を検討することを目的に実態調査を行うこととした。

11月の第3回センター運営会議にて、部門長より作成した研究計画書等、資料一式について提案を行い、部門内での検討を経て、1月の倫理委員会へ提出した。結果、3月に承認の通知を受けたところである。

本研究の実施により、看護研究への支援のあり方が明らかになれば、看護職への学習支援をニーズに即した内容にすることができ、新潟県内における看護研究の取り組みの増加、ひいては根拠ある看護の提示により看護の質向上にも貢献できると考える。

III 今後の取り組み

令和5年4月より、新潟県ホームページに公表され新潟県病院名簿（全県統一版）（令和4年4月1日現在）に掲載されている120病院に所属する看護研究推進担当者（該当者がいない場合は看護部長、またはそれに準ずる責任者）を対象に、調査を実施する。調査票の回収後は、分析を進め、結果を看護研究交流センターの地域課題研究開発部門、看護職学習支援部門の活動に反映させるとともに、看護系学会の学術集会等での発表や誌上で発表する予定である。

Ⅲ. 事務局報告

Ⅲ 令和4年度 出前講座実績 (開催順)

	開催日	テーマ	講師名	依頼主	参加人数
1	4/22(金)	人生会議を始めてみませんか？	酒井禎子	上越社協 大潟支所	25 名
2	5/16(月)	乳幼児のケガや体調不良時のホームケア	山田恵子	直江津地区公民館	6 名
3	6/15(水)	認知症のこと知りたい(入門編)	原 等子	木田寿会	25 名
4	7/27(水)	乳幼児のケガや体調不良時のホームケア	山田恵子	中郷地区公民館	17 名
5	7/28(木)	認知症のこと知りたい(入門編)	原 等子	能生地区まちづくり推進協議会	29 名
6	8/2(火)	人生会議を始めてみませんか？	酒井禎子	上越社協 板倉支所	12 名
7	8/9(火)	こころの病と健康と	佐々木三和	東城二長寿会	14 名
8	9/2(金)	こころの病と健康と	佐々木三和	上越社協 板倉支所	8 名
9	9/27(火)	「ハマル」ってどういうこと？	安達寛人	市立富岡小学校	7 名
10	10/5(水)	乳幼児の怪我や体調不良時のホームケア	山田恵子	真行寺幼稚園	12 名
11	10/14(金)	「ハマル」ってどういうこと？	安達寛人	県立上越特別支援学校	10 名
12	10/26(水)	日用品を代用した感染予防策を講じて行う応急手当	山田恵子	上越社協 頸城支所	10 名
13	12/5(月)	認知症のこと知りたい(入門編)	原 等子	上越社協 板倉支所	6 名
14	12/15(木)	認知症のこと知りたい(中級編)	原 等子	能生地区まちづくり推進協議会	23 名
15	12/16(金)	ハマルってどういうこと？	安達寛人	オギハラ工業株式会社	60 名
16	1/28(水)	人生会議を始めてみませんか？	酒井禎子	子安陽だまりサロン	12 名
17	2/1(水)	日用品を代用した感染予防策を講じて行う応急手当	山田恵子	真行寺幼稚園	8 名
				合計	284 名

令和4年度 出前講座アンケート結果（依頼者回答より要約）

実施件数：17件（依頼件数：18件）参加人数：284人

テーマ/講師名	講座への感想
<p>ハマるってどういうこと？</p> <p>講師：精神看護学講師 安達 寛人</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・依存症の人の脳に起きている事、予防についてあらためて知ることができた。また、参加者からの意見や経験談を聞くことができたことにより、継続的に関わることの重要性和難しさを再認識した。 ・依存症になる背景やその対策を、わかりやすく簡潔に教えていただいた。1時間という短い時間だったが、参加者から「わかりやすかった」という声が多かった。事前に講座資料をいただいたので、先生のお話とパワーポイントに集中できたと思う。 ・先生のお話がご自身の体験等に基づき且つ、具体的に参考になった。
<p>こころの病と健康と</p> <p>講師：精神看護学准教授 佐々木 三和</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍の関係で、開催に苦慮したが講師の方の心遣いにより開催を決意した。受講者が少数であり恐縮している。 ・講座の依頼は3回目になるが、各回とも高齢者に対しわかり易い内容で充実している。 ・佐々木講師様から解り易く講義していただき、受講者が我が身のごとく捉え、拝聴させていただいた。 ・心の病は、高齢者になる確率が多いことを学んだ。日々の生活を明るく過ごすように心がけていきたいと思う。 ・今回、心の病になる人が増加傾向にあることを知り、少しでも心の病にならないように日々生活したいと思う。 ・いろいろな病気の話聞くことができて良かった。 ・先生ご自身の体験を聞いて、身近に感じる事ができた。
<p>認知症の対応を知りたい （入門編）</p> <p>講師：老年看護学准教授 原 等子</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・図を使って説明され、理解できた。 ・参加者からの反応が多くあり、認知症になってしまう可能性のある方、認知症の家族に接しておられる方、その対応について大変参考になった。 ・認知症にならないための日頃の行動や心構え、認知症の方への心配り等、大切な項目をわかりやすくお聞きできて充実した講座となった。 ・認知症の当事者の体験談を紹介していただきとても参考になった。 ・身近な症例を聞き、声掛け方法等を具体的に学び、今後は優しく声掛けしていきたいと感じた。
<p>認知症という病気についてもっと知りたい （中級編）</p> <p>講師：老年看護学准教授 原 等子</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・7月にお願いした入門編の参加者が多く、より詳しく認知症への対応を学んでいただけたと思う。 ・認知症になってしまうとかんがえられている方、また認知症の家族を支えておられる人にも大変有意義な講座になったと思う。認知症を社会で支えることの必要性を学ばせていただいた。 ・講義中も立ってお話しいただき、参加者へのアプローチも有効であり、内容がよく伝わってきた。地域の皆さんの中で、話題にしていただけるきっかけになりました。

テーマ/講師名	講座への感想
<p>乳幼児の怪我や体調不良時のホームケア</p> <p>講師：小児看護学准教授 山田 恵子</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本事業についてアンケートを実施したところ、内容については全て「満足」の高評価でした。中でも家庭での発熱の対応、子どもにも AED が使用できることなど、大変ためになったとのことでした。 ・乳幼児は体調も崩しやすくケガも多い。また、言葉で伝えられない難しさもあり、保護者の方も自分のお子さんを前にして、いざという時にどうしてよいかわからず迷うことも多いと思う。最低限としての知識、対処法をわかり易くお話ししていただき、保護者も実になったと思う ・参加者からの質問に対し、ひとり一人に丁寧に回答いただき、参加者の満足度が高かった。また、ご用意いただいた資料もわかり易く、具体的な対応や手当について説明があり、「いざという時に役立つ」知識を学ぶことができた。
<p>“人生会議を始めてみませんか？”</p> <p>講師：成人看護学准教授 酒井 禎子</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・元気なうちに、自分が大切にしていることや望みを信頼する人たちに繰り返し話し、共有することが、自分らしくより豊かな人生を送れる。 ・自分の気持ちに向き合ったり、他の人の話を聞いたり、とても有意義な講座だった。酒井先生、大変ありがとうございました。 ・参加者は、もしもの時自分がどうしてほしいか考える機会がない人が多く、カードゲームを通じて、いろいろな考え方などを話すことができて良かった。とても良かったので、カードゲームを購入し、他の会合で使用された方もいた。
<p>日用品を代用した感染予防策を講じて行う応急手当</p> <p>講師：小児看護学准教授 山田 恵子</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者のほとんどが 70 歳以上の高齢者でしたが、講師の説明はわかりやすかった。また、実技を交えての講座だったので、参加者も楽しそうにやっていた。実際に行ってみることで身についたという意見があった。 ・小さなお子さんを持つ保護者の方にぴったりのテーマだった。身近にあるものを使い、応急手当あの方法をととてもわかりやすく教えていただき、参加された保護者も喜んでおられた。体験型というのが良かった。

◆出前講座についてのご意見・ご感想など、お気づきの点をご自由にお書きください。

- ・また講座を聞きたいという人が多かった。
- ・この地域も高齢化が進み、ひとり世帯が多く「認知症」についての心配が叫ばれています。機会をとらえて、認知症をテーマに出前講座の依頼を考えています。
- ・誰もが直面している課題であり、内容の濃いお話でした。いただいた資料もわかりやすく、皆さんから好評を得たものと思います。これからも課題に沿った出前講座をお願いしたいと思います。
- ・参加人数が少なく、講師として来ていただいたのに申し訳ない気持ちでした。しかし、先生は、参加者が抱くホームケアについての心配や不安を丁寧に聞いて、それぞれに対し、やさしく寄り添ったことばで回答してくださいました。おかげで、これまでにない講座を実施することができました。また、来年も出前講座を依頼したいと考えています。
- ・メールや FAX で丁寧な対応をしていただきました。
- ・初めて活用させていただきました。専門的な話を聞く機会を設けることができ、ありがたかった。今後も活用させていただきたいです。
- ・今後も、身近なメンタルヘルスケアについての講義を考えてください。

IV. 令和 4 年度地域課題研究助成の報告

2021 年度地域課題研究

1. 齊藤千恵子：糸魚川総合病院
2. 清水 博美：新発田リハビリテーション病院
3. 本山 和樹：長岡赤十字病院
4. 斎藤真樹子：総合リハセンターみどり病院
5. 佐藤予右子：前) 上越地域医療センター病院
6. 赤川 美穂：長岡赤十字病院
7. 柳澤絵里奈：県立中央病院
8. 本田ひとみ：県立リウマチセンター
9. 土屋 尚：新潟労災病院
10. 水澤三津江：新潟労災病院

A 病院の新人看護師が経験したリアリティショックとそれを乗り越えた要因

1. 研究代表者及び所属

研究代表者：齊藤千恵子 新潟県厚生農業協同組合連合会糸魚川総合病院

2. 研究分担者氏名

- ・山崎佑梨花 (所属：新潟県厚生農業協同組合連合会糸魚川総合病院)
- ・田原 純一 (所属：同上)
- ・長野 実沙 (所属：同上)

3. 学内責任者

新潟県立看護大学：石田和子

4. 研究助成金執行報告

(円)

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	58,018	0	0	33,440	91,458

5. 研究成果の公表

2022 年 12 月 糸魚川総合病院院内看護研究発表会において発表することを計画している。

A 病院の新人看護師が経験したリアリティショックとそれを乗り越えた要因

齊藤千恵子¹⁾ 山崎佑梨花¹⁾ 田原純一¹⁾ 長野実沙¹⁾ 石田和子²⁾

1) 新潟県厚生農業協同組合連合会糸魚川総合病院 2) 新潟県立看護大学

キーワード：新人看護師（以下、新人）、リアリティショック、要因

【目的】A 病院の新人が経験したリアリティショックとそれを乗り越えた要因を明らかにする。

【方法】研究デザイン：質的帰納的方法。対象：2021 年 4 月 1 日時点での入職 1 年未満、2 年目、3 年目の新人 28 名。調査期間：2021 年 10 月 1 日～12 月 20 日。データ収集方法および分析方法：研究参加の同意を得られた対象者に、入職後経験した心理的、社会的、技術的、身体的側面について「リアリティショック」として感じたことと、「乗り越えた要因」について、自由記述式質問紙法を実施した。得られた回答について、一文章一意味になるようにしてその意味を損ねないように逐語録に起こした。逐語録から「リアリティショック」と「乗り越えた要因」に関する言葉を抽出してコード化し、コードの類似性に従い、サブカテゴリー、カテゴリーに分類した。

【倫理的配慮】研究対象者には、調査への自由意思による参加や拒否、研究目的以外にデータを使用しないこと、匿名性を厳守すること等を説明し、研究同意文書へ署名することについて、A 病院倫理委員会に承認を得て実施とした。

【結果】対象者 28 名中 25 名より、質問紙の回答が得られた。対象者の概要は、入職 1 年未満 11 名、2 年目 7 名、3 年目 7 名であった。全回答 811 のコード分析において「リアリティショック」については 364 コード、25 サブカテゴリー、10 カテゴリー、「乗り越えた要因」については 419 コード、37 サブカテゴリー、11 カテゴリーが抽出された。以下カテゴリー《 》、主なサブカテゴリー〈 〉を示す。「リアリティショック」は、《自分の知識・技術に自信が持てないことによる不安》〈部署により経験できる技術に差があり、同期に後れを感じ不安になる〉《自分の力量以上の業務に対しての負担感》《一日の業務計画通りに仕事が進まず、終わらないことに対する憤り》《夜勤業務が想像以上に大変であり不安》《学生の頃の学びや実習と比較し不満》《患者や家族への対応に困惑》《他者とのコミュニケーションに悩む》〈先輩、上司には相談しにくい〉〈同期と関わることが少なく悩みを共有できにくい〉《十分に指導されていないという不満》〈指導をプリセプターなどの特定の人に任せきりにして、十分に教えてもらえない〉〈コロナ禍で集合研修が少なく内容が不十分〉《給料が低く、職場へのモチベーションが上がらない》《休日と勤務のバランスが悪く辛い》であった。

「乗り越えた要因」は、《新人看護師へのサポート体制がしっかりしていて学びやすい》〈臨床現場で未経験の技術を優先的に学んでいる〉〈プリセプターが付いてサポートして、不安な技術を確認してもらえるので助かる〉〈優しくわかりやすい指導で、満足している〉《研修が勤務時間内に企画されているので学びやすい》《新しい知識、技術が習得できると、やりがいがある》《業務調整してもらい仕事にも慣れ、休暇もとれている》《患者に感謝を伝えられると、励みになる》《優しく対応してくれる上司や先輩がいて安心》〈上司、先輩に優しく対応してもらえ、相談しやすく、安心できる〉〈話しやすい上司、先輩を選んで、タイミングをみて関わる、相談する〉《家族や先輩、同期、後輩との交流により頑張れる》《人間関係や環境に慣れて働きやすい職場》《メンバーと協力が出来、安全かつ効率的な業務》《看護実践の振り返りと自己学習、経験を重ね、後輩へ指導したい》《休暇を有効に活用しリフレッシュ》であった。

【考察】新人への支援として、社会人基礎力の育成とともに、新人を職場全体で優しく見守り、育成していくという寛容さを持った職場環境の構築と、リアリティショックを早期に発見できるよう配慮していくことが重要であると示唆された。

【結論】A 病院の新人が経験したリアリティショックは、力量不足による不安、困惑、負担感、焦り、他者とのコミュニケーション困難であった。リアリティショックを乗り越えた要因は、効果的な OJT、OFFJT、他者との良好な関係、良好なチームワークによる安全かつ効率的な業務、看護への喜び、励みであることが明らかになった。

本研究は、令和 3 年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けた。

多職種協働で立ち上げた認知症ケア委員会の取り組み

1. 研究代表者及び所属

代表者氏名： 清水 博美 所属：新発田リハビリテーション病院

2. 学内責任者

新潟県立看護大学 ：原 等子

3. 研究助成金執行報告

(円)

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	36,055	0	0	63,945	100,000

4. 研究成果の公表（100 字以内）

予定なし

多職種協働で立ち上げた認知症ケア委員会の取り組み

清水博美¹⁾ 原 等子²⁾

1) 新発田リハビリテーション病院 2) 新潟県立看護大学

キーワード：多職種協働，認知症ケア，認知症ケア委員会

〈目的〉当院はリハビリテーション病院に介護老人保健施設が併設されている。病院では、認知症をもつ入院患者様が增加している。認知症をもつ人への対応については、スタッフの中で対応方法に悩み、疲弊している者も多い。そこで、認知症看護認定看護師として、認知症患者様一人一人に合った認知症ケアを病院全体に広げていくことが必要であると考え、多職種をメンバーとした認知症ケア委員会を立ち上げた。今回は、病院スタッフの認知症ケアへの意識調査を実施し、その調査結果をもとに委員会としてスタッフの思いを把握することで、ケアの現場での対応の改善方法を検討し、認知症ケア委員会のメンバーがやりがいを持てる事を目的とした。

〈方法〉2021年8月に病院スタッフ244名（看護師、介護職、リハビリ職、栄養士等）に認知症ケアに関する意識13項目の質問紙調査（5件法 該当しないを含む）を実施した。その結果を認知症ケア委員会メンバーと共有し、個別にインタビュー調査を実施し委員会としての活動を評価した。

〈結果〉[認知症ケアではやりたいケア・看護をする時間が足りない]について、〈そう考える・非常にそう考える〉が85%を占めていた。その理由は、「じっくり聞いてあげられない」「統一したケアが出来ない」であった。[認知症患者様の思いや状況の把握や分析を行う事は難しい]は〈そう考える・非常にそう考える〉が72%であったが、「時間があればやれる」「やってみたいが多忙でやれる時間がない」自由記載が過半数を占めていた。また、[抑制をしたくないが、安全を守る為には必要な事だと思う]は〈そう考える・非常にそう考える〉78%であった。この自由記載には、「施設勤務のスタッフは抑制が出来ない為、一切しておらず代替えケアを提供している」「病院スタッフは、安全よりもスタッフの手間の為に行っている」「安全の為には仕方がない」という意見があった。これらの結果を認知症ケア委員会で検討し、病院全体のスタッフの思いを把握した。その上で、委員会活動をどうしていきたいかメンバー16名に個別にインタビュー調査を行った。その結果、「時間や人員不足から限られた時間で有効なケアを検討できるような、ケアツールを作成していきたい」「抑制している状態が当たり前にならないように、働きかけをしていきたいと思った」などの意見が聞かれた。

〈考察〉認知症ケアに関する質問紙調査をスタッフに実施した結果、認知症ケアとして話を傾聴し患者の不安の軽減に努めることや統一したケアでの環境調整が大切だが、出来ないジレンマがあることがわかった。限られた時間で出来る実践方法を提案していくことも認定看護師や認知症委員会の役割であると考えた。また、スタッフはアセスメントには時間がかかり難しいと考えていたことや抑制が当たり前になっている現状から、簡潔なケアツール方法の検討や、抑制低減の働きかけなど認知症ケア委員会としての活動の方向性と、委員会メンバーの目的意識を明確にできた。

〈結論〉病院スタッフの認知症ケアに対しての思いを知る事で、認知症ケア委員会スタッフのやる気に繋がった。

なお、本研究は令和3年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した。本研究による利益相反はない。

虚血性心疾患を併発した糖尿病患者の療養生活への思い

1. 研究代表者及び所属

研究代表者：本山 和樹 （所属：長岡赤十字病院）

2. 研究分担者氏名

中野 千瑛（所属：長岡赤十字病院）

齋藤 汐莉（所属：同上）

3. 学内責任者

新潟県立看護大学：小林 綾子

4. 研究助成費執行報告

(円)

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	6,080	0	11,187	70,708	87,975

5. 研究成果の公表（100 字以内）

本研究は、第 53 回日本看護学会学術集会（11 月 8 日 群席番号：ポスターM-8-1）への口頭・ポスター発表および日本看護学会誌への投稿、長岡赤十字病院の看護研究発表会への口頭発表の参加を予定している。

虚血性心疾患を併発した糖尿病患者の療養生活への思い

本山 和樹¹⁾ 中野 千瑛¹⁾ 齋藤 汐莉¹⁾ 小林 綾子²⁾

1)長岡赤十字病院 2)新潟県立看護大学

キーワード：糖尿病，虚血性心疾患，療養生活，思い

【目的】本研究の目的は、虚血性心疾患を併発した糖尿病患者の経皮的冠動脈形成術（以下 PCI）後の療養生活への思いを明らかにし、虚血性心疾患再発予防のための入院中の看護への示唆を得ること。

【方法】対象は令和 2 年 9 月から令和 3 年 4 月に PCI 後 8 カ月の冠動脈造影検査のため A 病院に入院した糖尿病患者であった。データ収集期間は令和 3 年 5 月から 8 月であった。データは、インタビューガイドを用いた半構造化面接法により収集し、質的記述的分析を行った。長岡赤十字病院医療倫理委員会の承認（承認番号 210401）と同病院研究倫理審査委員会の承認（受付番号 2021-1-②）を得て実施した。

【結果】対象は同意が得られた 50 歳代から 70 歳代の虚血性心疾患を併発した糖尿病患者 4 名で、糖尿病合併症による自覚症状はなかった。虚血性心疾患を併発した糖尿病患者の PCI 後の療養生活への思いとして 9 つのカテゴリーが抽出された。カテゴリーは「死の恐怖を契機とした生活改善への意欲」「不摂生な生活や体調の変化への気付き」「活動時の体調の悪さへの気付き」「食事療法への苦悩を抱え、模索しながら改善を望む」「運動療法への期待と継続への意欲」「薬の飲み忘れの弊害を推測し、忘れないよう思慮」「医師からの治療への期待」「役割を自覚し、家族を想う」「気を緩めず療養生活を送ることを決意」であった。

【考察】本研究対象者は、PCI 後 8 カ月経過していたことや、「食事療法への苦悩を抱え、模索しながら改善を望む」「運動療法への期待と継続への意欲」といった前向きな思いが語られていたことから、フィンクの危機モデルの回復のプロセスで考えると適応の段階にあったと推察された。また、適応の段階に移行するために承認の段階では援助者のサポートが最も重要な時期であるとされている。結果では、退院後の療養生活の中で家族から支援を受けられたことに感謝する思いが示されており、退院後に家族からのサポートが受けられたことで、前向きに療養する思いを促進したのではないかと考えた。以上のことから、患者が回復のプロセスのどの段階にいるのか把握し、それに合わせた生活指導をすることが重要であると考えた。また、家族の関わりは前向きに療養生活を送るために重要であることから、入院中の生活指導時は本人だけではなく、家族と共に継続可能な生活改善点を考えることが必要である。

本結果では、発症前の体調を振り返り、自身が感じていた症状が虚血性心疾患の症状であったことに気づきを得ていた。自覚症状のない糖尿病患者の場合、虚血性心疾患を契機に体調に関心が向けられ「不摂生な生活や体調の変化への気付き」を得るのではないかと考えられた。入院中の指導の際は、体調に関心を寄せやすいことを活かし、状態悪化時の症状をパンフレットを使用して説明し、早期受診に繋げる必要がある。

【結論】虚血性心疾患を併発した糖尿病患者の PCI 後の療養生活への思いとして、9 つの思いが抽出された。糖尿病患者の虚血性心疾患再発予防のための入院中の看護としては、患者だけでなく、家族と共に継続可能な生活改善点を考えることが必要である。また、体調に関心を寄せやすいことを活かし、状態悪化時の症状を指導する必要性が示唆された。

利益相反：令和 3 年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した。

人生の最終段階と説明を受け患者の家族などの代理決定者の葛藤

1. 研究代表者及び所属

研究代表者：斎藤真樹子 所属：総合リハビリテーションセンターみどり病院

2. 研究分担者氏名

鍋田 千鶴 所属：総合リハビリテーションセンターみどり病院

3. 学内責任者

新潟県立看護大学：前川絵里子

4. 研究助成金執行報告

(円)

予算額	91,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	9,798	0	46,369	34,092	90,259

5. 研究成果の公表（100 字以内）

本研究は日本老年看護学会第 27 回学術集会にて発表を行った。

人生の最終段階と説明を受けた患者の家族などの代理決定者の葛藤

齋藤真樹子¹⁾，鍋田千鶴¹⁾，前川絵里子²⁾，井上智代³⁾

1)総合リハビリテーションセンターみどり病院 2)新潟県立看護大学 3)前新潟県立看護大学

キーワード：人生の最終段階，代理決定者，葛藤

【研究目的】本研究は、人生の最終段階と説明を受けた患者の家族などの代理決定者の葛藤について、代理決定者へのインタビュー内容から整理することを目的とする。

【研究方法】対象者はA病院で亡くなられ、かつ人生の最終段階と説明を受けた患者の家族などの代理決定者とした。対象者へ郵送により研究目的、方法、倫理的配慮、対象者への利益・不利益、個人情報保護について説明し、承諾の得られた対象者にインタビューを行った。インタビュー内容は、代理決定者として葛藤、精神的負担についてなどとした。代理決定者の葛藤に関する文脈を意味内容が損なわれないよう発言内容を抽出し、意味内容の類似性から段階的に抽象度を上げサブカテゴリ化、カテゴリ化をした。

本研究は所属病院の倫理審査委員会の承認を経て行った（承認番号 2021.004）。

【結果】協力の得られた 11 人を分析対象とした。129 の発言内容は 10 サブカテゴリに整理され、《患者本人の真の本心は分からないので自分が決めてよいのか》《過去の苦い経験が影響し、患者本人の意見をそのまま尊重してよいのだろうか悩む》《どのような選択をしても自分に後悔が残るだろう》《病状により患者本人と自分の納得の行く療養の場を選択したくてもできない》《食など本人の望みを叶えてあげたくても、叶えてあげられない》《家庭事情により患者本人が自宅での看取りを希望しても叶えられない》《患者本人の気持ちと自分・家族の意向との間に差を埋められない》《自分の延命して欲しいという意味決定が患者本人を苦しめることになるのではないか》《自分では、まだほかの治療方法があるのではないかと感じている》《自分や患者本人の意思決定よりも、医療者に勧められる考えを尊重する雰囲気にとまどう》という内容であった。これらより〔自分には患者本人の真の本心は分からない中で、自分の代理決定でよいのか悩む〕〔患者本人の意向を尊重したくても叶えられない現状との間に自分にジレンマがある〕〔患者本人の意向よりも後悔しないよう自分と自分以外の家族の意思を尊重したいと思ってしまう〕〔治療方針に納得できない中での意思決定を求められることの苦悩〕の 4 カテゴリに整理された。

【考察】代理決定者は、患者、家族、置かれている環境、治療方針との間で迷いながら自己決定している様子がうかがえる。代理決定者が置かれている状況を理解し支えていくことが重要であると考ええる。

【結論】本研究で代理決定者は、代理決定者自身には患者の真の本心は分からない中で、自分の代理決定でよいのか悩む、治療方針に納得できない中での意思決定を求められることの苦悩、患者本人の意向を尊重したくても叶えられない現状との間に自分にジレンマがある、患者本人の意向よりも後悔しないよう自分と自分以外の家族の意向を尊重したいと思ってしまうという、代理決定者の葛藤が明らかになった。

代理決定者は、患者、家族、置かれている環境、治療方針との間で迷いながら自己決定している様子があった。そのため医療者側は、相手の価値観を理解し、尊重するためには、相手を理解することだけではなく、自分の価値観に気づくことも重要なことである。その上で、代理決定者の置かれている状況を対話を通じて理解していくことが重要であると考ええる。

【利益相反】令和 3 年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した。

高齢患者の終末期における治療と人工栄養に関する意思決定支援の現状と課題
 ―地域包括ケア病棟に勤務する看護師に焦点を当てて―

1. 研究代表者及び所属

研究代表者:佐藤予右子 所属:日本医療大学 保健医療学部 看護学科
 (前 上越地域医療センター病院)

2. 研究分担者氏名(所属)

- ・小野 幸子 (所属:日本医療大学 保健医療学部 看護学科
 前 新潟県立看護大学)
- ・河原畑尚美 (所属:日本医療大学 保健医療学部 看護学科
 前 新潟県立看護大学)

3. 研究助成金執行報告

(円)

予算額	99,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	0	0	1,848	61,977	63,825

4. 研究成果の公表(100字以内)

高齢患者の終末期における治療と人工栄養に関する意思決定支援において、本人の意向確認への看護師の関心、意思決定支援における医師との連携への期待が示され、その実現に向けた体制や学習環境整備が課題である。

高齢患者の終末期における治療と人工栄養に関する意思決定支援の現状と課題

—地域包括ケア病棟に勤務する看護師に焦点を当てて—

佐藤予右子¹⁾, 小野幸子²⁾, 河原畑尚美²⁾

1) 前上越地域医療センター病院, 2) 前新潟県立看護大学

キーワード: 高齢患者, 終末期, 意思決定支援, 地域包括ケア病棟

【目的】地域包括ケア病棟に勤務する看護師が高齢患者の終末期における治療と人工栄養に関する意思決定支援について、どのように捉え実践しているか、その現状と課題を明らかにすることである。【方法】1) 研究対象者: A 病院地域包括ケア病棟において、終末期における治療と人工栄養に関する意思決定支援を行った事例について想起し、看護実践内容を語ることができる看護師。2) データ収集方法: 同意が得られた研究対象者個別に、インタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した。面接内容は研究対象者の承諾を得て録音を行い、逐語録としたものをデータとした。3) 分析方法: 内容の類似性に基づき、分類整理した。【倫理的配慮】研究対象者に対し、口頭及び文書にて研究の主旨、研究参加の自由意思、匿名性の確保、研究結果の公表等について説明し署名をもって承諾を得た。また A 病院倫理審査委員会の承認を得て実施した。【結果】研究参加者 5 名から得られた高齢患者 5 事例の終末期における治療と人工栄養に関する意思決定支援の実践内容、及び意思決定支援における思いや考えは、その対象が『患者』『家族』『関係職種』に分類された。実践内容は『患者』対象として〈好物や食べたい物の把握〉〈好みや持てる機能に合った食品の選択・食形態の調整〉〈言動や反応から本人の意思や意向を察した〉の 3 個、『家族』対象として〈治療内容等の選択肢の提示〉〈選択した治療法によって起こり得るリスク等の説明〉〈治療内容の選択時の熟慮と意向変更の保障〉〈選択・同意した内容の繰り返しの確認〉〈家族の意向確認する機会の意図的な設定〉〈家族の意向優先・重視〉等の 12 個、『関係職種』対象として〈病棟看護師とのカンファレンスでの話し合いや看護方針共有〉〈退院調整看護師の協力を得た〉〈医師にインフォームドコンセントや家族との話し合いを依頼〉〈医師に本人と家族の意向を伝え方針を共有〉の 4 個が示された。また意思決定支援における思いや考えは『患者』対象として〈適時的に意向確認できなかったことへの後悔〉〈意向確認への関心〉〈意思確認のタイミングは重要〉〈高齢者や認知症高齢者への意向確認はとりわけ困難〉の 4 個、『家族』対象として〈意向確認できなかったことへの後悔〉〈繰り返しの意向確認は重要〉〈本人の意思確認困難な場合の、家族の意向重視は大事〉〈家族の揺れ動く思いや家族内の意見対立への理解〉〈本人よりも家族の意向を聞く理由は曖昧〉〈本人よりも家族の意向優先の流れ、医療者主導の流れがある〉の 6 個、『関係者』対象として〈医師との連携における自信〉〈医師との連携における困難感〉〈医師との連携における要望と期待〉の 3 個が示された。そして意思決定支援における思いや考えについては『その他』として〈治療方針や看護方針への疑問と、本人と家族の意向実現への期待との葛藤〉〈受け持ち看護師の責務への重圧感〉〈意思決定支援実現に向けた看護・医療提供体制及び院内マニュアル整備への期待〉〈意思決定支援実現に向けた学習ニーズ〉〈(実体験をふまえ)終末期について家族と話し合うことへの困難感〉が示された。【考察】A 病院地域包括ケア病棟の看護師の、終末期における治療と人工栄養に関する意思決定支援の実践内容の特徴として『患者』より『家族』対象の実践内容が多く、高齢患者の意思確認においては本人よりも家族の意向が重視・優先されやすい現状が反映されたものとする。一方、〈意向確認への関心〉〈意思決定支援実現に向けた学習ニーズ〉も示され、本人の意向確認の必要性・重要性は認識していると捉えられる。そして意思決定支援における思いや考えの特徴は、『関係職種』対象において医師との連携のみが示され、他方、〈意思決定支援実現に向けた看護・医療提供体制及び院内マニュアル整備への期待〉も示されていることから、意思決定支援における医師との連携を重要視していることが反映されたと考えられる。【結論】高齢患者の終末期における治療と人工栄養に関する意思決定支援において、本人よりも家族の意向重視・優先の現状とともに、本人の意向確認への看護師の関心、意思決定支援における医師との連携への期待が示され、その実現に向けた体制や学習環境整備が課題である。本研究は、令和 3 年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した。

臓器提供の各段階における必要な看護ケア～ご家族への看護を振り返って～

1. 研究代表者及び所属

研究代表者：赤川 美穂

所属：長岡赤十字病院

2. 研究分担者氏名

・若井 奏理（所属：長岡赤十字病院）

・横山 亜希（所属：同上）

・長澤 聡子（所属：同上）

3. 学内責任者

新潟県立看護大学：山田 恵子

4. 研究助成金執行報告

(円)

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	52,608	0	1,344	38,435	92,387

5. 研究成果の公表（100字以内）

1) 新潟県立看護大学 2021 年度地域課題研究発表会にて発表：令和 4 年 10 月 1 日（土）

2) 第 58 回日本移植学会総会にて発表：令和 4 年 10 月 13 日（木）～10 月 15 日（土）

3) 長岡赤十字病院院内看護研究発表会にて発表：令和 4 年 11 月

臓器提供の各段階における必要な看護ケア ～ご家族への看護を振り返って～

赤川美穂¹⁾ 若井奏理¹⁾ 横山亜希¹⁾ 長澤聡子¹⁾ 山田恵子²⁾ 高橋絹代³⁾

1) 長岡赤十字病院集中治療室 2) 新潟県立看護大学看護学部 3) 富山福祉短期大学看護学科

キーワード:臓器提供, ドナー家族, 危機, 意思決定

＜目的＞A 病院ではこれまで 22 例の臓器組織提供を行い、内、脳死下臓器提供は 10 例であった。看護師へのアンケートでは緊張感や疲労感などの心理的負担を感じていた。そこで看護師が負担なく看護を実践できることを目的に、①臓器提供のオプション提示②家族の意思決定③2 回目の脳死判定と死亡宣告④臓器摘出⑤退院の 5 つの段階に応じた看護ケアを明らかにした。

＜方法＞研究デザイン:事例研究,研究期間:令和 3 年 4 月 1 日～令和 4 年 9 月 21 日,調査対象:脳死下臓器提供者看護記録 2 事例,データ収集方法:入院中の看護記録を用いた。分析方法:内容をカテゴリーに分類しコード化を行った。

＜倫理的配慮＞長岡赤十字病院医療倫理委員会(承認番号 第 201615 号)および長岡赤十字病院看護部研究倫理審査委員会(受付番号 2021-2-③)の承認を得て行った。

＜結果＞各段階で抽出されたカテゴリーを下記に示す。①臓器提供のオプション提示:家族【臓器提供の情報ニーズ】【家族の思い】【代理意志決定】,看護師【情報提供 理解度の確認】【家族への配慮 連絡調整】【本人意思確認(親族を介して)】,②家族の意思決定:家族【臓器提供の情報ニーズ】【家族の様子】【代理意志決定】,看護師【情報提供 理解度の確認】【家族のアセスメント】【連絡調整】,③2 回目の脳死判定と死亡宣告:家族,【家族の希望】【家族の様子】【心の揺れ動き】【患者への心配】,看護師【患者ケア】【家族のアセスメント】【家族への配慮】,④臓器摘出:家族【家族の様子】,看護師【連絡・調整】【家族への配慮】,⑤退院:家族【臓器提供後の思い】【家族の様子】【ケアへの参加】【提供後の情報ニーズ】,看護師【家族への配慮】【家族のアセスメント】【家族と患者の対面】【情報提供】

＜考察＞家族はオプション提示から意思決定の段階で「臓器提供の具体的な話が聞きたい」「提供時の時間経過を知りたい」等の情報のニーズが高かった。また入院前の本人の言動を拠り所に代理意思決定を行っていた。2 回の脳死判定と死亡宣告の段階では、「家族自身の体調管理や患者との思い出や別れの準備」等が抽出され、家族で過ごせる最後の時間の確保のニーズがあった。臓器提供後は、「家族も誇りに思って生きていける」「人の役に立ちたい人だったので、やってやったんだぞ、と言うと思う」等家族の思い、満足感、達成感を医療者に語られた。看護師は意思決定までの期間、情報提供や理解度の確認を行っていた。全ての段階で、患者の整容に努め面会の調整と家族だけの空間の確保、体調への気遣いや家族の思いを傾聴していた。看護師は臓器提供の知識を活用し、家族にいつでも支援・対応してもらえという安心感を与える姿勢が不可欠である。以上から看護師は患者へのケアと並行して、家族のアセスメントを行い、ニーズを把握したうえで、常に患者に寄り添い、達成感や満足感等の感情を承認・共感し支援していくことが重要な看護ケアであると考ええる。

＜今後の課題＞本研究対象が 2 事例のため、今回明らかになったことが今後、他事例でも有効かを臨床で活用し確認していくことが課題となる。

＜結論＞意思決定までは家族の高い情報ニーズに対し、十分な知識に基づいた正確・迅速な情報提供と休息の配慮を含めた環境調整、声掛けが重要である。全過程において、多様に変化する家族のニーズを細かく捉えた対応と、常に家族に寄り添い達成感や満足感等の感情を承認・共感し支えていく姿勢が重要である。

・本研究は、令和 3 年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受け、実施した。

三次救急を担う A 病院におけるがん放射線療法看護の現状

1. 研究代表者及び所属

研究代表者：柳澤絵里奈

所属：新潟県立中央病院

2. 学内責任者

新潟県立看護大学：酒井 禎子

3. 研究助成金執行報告

(円)

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	0	0	32,175	53,851	86,026

4. 研究成果の公表（100 字以内）

日本放射線看護学会第 11 回学術集会（2022 年 9 月 17 日・18 日、web 開催）にて発表予定。

三次救急を担う A 病院におけるがん放射線療法看護の現状

柳澤 絵里奈（新潟県立中央病院） 酒井 禎子（新潟県立看護大学）

キーワード：放射線療法，がん放射線療法看護，看護師

【目的】A 病院は三次救急を担う地域の中核病院であると同時に，地域がん診療連携拠点病院でもある．しかし，院内外の異動があるためがん放射線療法における看護師の経験知は差がある．現状を把握し，今後のがん放射線療法看護の質向上につなげるため，A 病院のがん放射線療法看護の現状を明らかにする．

【方法】がん放射線療法看護の現状と学習ニーズについて問う無記名の自記式質問紙を作成し，放射線治療を受ける患者が多く入院する 4 病棟の看護師を対象に配布，自由意思で回答してもらい，留め置き法で回収した．多肢選択式の項目は記述統計を行い，自由記述式の項目は記述内容を類似性・相違性に基づいて分類・要約し分析した．

【倫理的配慮】本研究の遂行にあたっては研究者の所属施設における倫理審査を経て実施した．（第 2115 号）

【結果】アンケートは 115 部配布して 80 部を回収，回収率 69.6%だった．アンケートを回答した 80 名の 95%（n=76）ががん放射線療法を受ける患者の看護経験があった．（以下文中の%は，回答者 80 名のうち，各選択肢の無回答者を除いた回答者数を 100%とした．）

1. 照射部位の把握と観察について

放射線治療を受ける患者の照射部位の把握方法は「患者の体に書かれた線で確認」が「いつもする」「時々する」を合わせて 71 名（95%）と一番多く，「電子カルテ内，放射線治療計画の画像で確認」は 35 名（47%），「疾患から今までの看護経験等で予測」は 36 名（49%）だった．また，観察部位については「患者の体に書かれた線の部位」の観察が「いつもする」「時々する」を合わせて 75 名（100%）と一番多く，「放射線治療計画の画像で確認した部位」は 40 名（40%），「疾患から看護師間又は自身で照射していると予測した部位」は 52 名（80%）だった．

2. 放射線治療を受ける患者のセルフケア支援について

急性期有害事象に対して「症状が出現する前から予防的にケアや指導を始める」看護師は，放射線性皮膚炎に対する皮膚の保清は 28 名（35%），保湿は 21 名（26%），口腔粘膜炎に対する口腔ケアや含漱の指導介入は 32 名（40%），食道炎に対する食事の工夫や摂取時の指導介入は 19 名（24%）だった．

3. 放射線治療を受けた患者の退院指導について

退院指導の経験が「ある」看護師は 31 名（39%）だった．

4. 外来で行っていること，外来との連携について

放射線治療開始までの流れを「知っている」看護師は 24 名（30%），外来で行われているオリエンテーションについて「知っている」看護師は 14 名（18%）だった．

5. 学習ニーズについて

がん放射線療法看護に関する興味のある学習会テーマで選択の多いものは「放射線治療の基礎知識」49 名，「放射線治療計画画像の見方」37 名があった．

【考察】照射部位の把握と観察では，がん放射線療法看護の経験年数に関わらず「体に書かれた線＝照射部位」と認識がされ，照射部位を予測して観察している割合が多かった．放射線治療計画画像の重要性や見方の周知が不足している可能性がある．学習会ニーズでは放射線治療の基礎知識や治療計画画像の見方について関心が高いため，学習ニーズと結び付け放射線治療，看護の基礎教育を強化していく必要がある．

急性期有害事象に対しては，症状出現前からの指導やケア介入が重要であるが，予防的介入は半数に満たない状態にある．放射線治療のどの時期にどのような介入が必要かを示した院内で統一されたツールが必要である．外来との連携において，病棟で退院指導を行う割合は少なく，放射線治療開始までの流れやオリエンテーションについて知っている割合も少ない状態にある．退院指導を行う割合が少ない要因として＜退院指導を外来で行っていると考えている可能性＞＜がん放射線療法看護の経験年数が浅い看護師は指導内容・方法がわからない可能性＞＜退院指導を行う機会がない又は少ない可能性＞が考えられる．退院指導について外来と病棟のそれぞれが行うことを明確にすること，看護師間で指導に差が生じないように指導内容を明確にすることが必要である．

【結論】がん放射線療法看護の基礎教育強化や急性期有害事象の予防的介入，そして放射線治療科外来で行うケアについての発信と周知の必要性が示唆された．

【COI】本研究に関連し開示すべき COI はありません．本研究は，2021 年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した．

関節リウマチ患者における手の洗い残し調査

1. 研究代表者及び所属

研究代表者：本田ひとみ 所属：新潟県立リウマチセンター

2. 研究分担者氏名

- ・佐久間あゆ美（所属：新潟県立リウマチセンター病院）
- ・松井 弥咲（所属：同上）

3. 学内責任者

新潟県立看護大学 ：酒井 禎子

4. 研究助成費執行報告

(円)

予定額	78,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	22,030	0	0	47,986	70,016

5. 研究成果の公表

第 50 回日本関節病学会（2022 年 10 月 22 日）発表予定

関節リウマチ患者における手の洗い残し調査

本田ひとみ¹⁾、佐久間あゆ美¹⁾、松井 弥咲²⁾、酒井 禎子³⁾

1)新潟県立リウマチセンター、2)新潟県立中央病院、3)新潟県立看護大学

キーワード：関節リウマチ、手洗い、感染予防

目的：関節リウマチ（rheumatoid arthritis：以下 RA）は、生物学的製剤などの治療により感染症に注意を要するため日頃の感染予防は重要である。しかし、入院する RA 患者において十分に洗えていない場面も多く見られる。そこで本研究では、手の洗い残しの程度や関連要因を明らかにする調査を行った。

方法：調査期間は 2021 年 7 月から同年 11 月とし、A 病院 B 病棟に入院している RA と診断されている患者 55 名を対象とした。調査内容は①対象者の背景や手洗い状況、②手洗い後の洗い残しの程度、③洗い残しに関連すると予想される要因とした。調査方法は、カルテからの情報収集、質問紙調査、および手洗いチェッカーを用いた手の洗い残し調査を実施した。手の洗い残し調査は、手洗いチェッカーを用いて爪、指、指間、手背、指先、手掌、手首に分けて調査し、洗い残しを両手 92 部位に分け 1 部位 1 スコアとして洗い残しスコアを求めた。分析方法として、対象者の背景（基本属性、身体的状況）、両手の洗い残しスコア、手洗いに関する状況、手の洗い残し分布（爪、指、指間、手背、指先、手掌、手首）については基本統計量を算出した。関連の有意性を確認するために、手の洗い残しスコアを従属変数、対象者の背景を独立変数として単回帰分析を行った。本研究は、A 病院の倫理審査委員会にて承認を得た。対象者には本研究の趣旨、方法について口頭と文書で説明し、同意を得たのちに調査を実施した。

結果：対象者の平均年齢は 69.7 歳（±9.4）、性別は男性 8 例（14.5%）、女性 47 例（85.5%）と女性が多かった。同居家族の有無は、同居家族あり 48 名（87.3%）、同居家族なし 7 名（12.7%）であった。手に変形のある患者は 28 名（50.9%）おり、平均変形部位の数は手指や手関節に 1.7 部位（±2.3）であった。普段の手洗いについては、外出後・掃除後・調理前・食事前・トイレ後の手洗いについて「いつも洗う」「だいたい洗う」と答えた人は 7 割以上であった。手の洗い残し分布は、左右とも手背側で爪と指間の洗い残しが多く、手掌側より手背側の洗い残しが多かった。各部位の洗い残しは 4 割以上を超える結果となった。関連の有意性を確認するための単回帰分析では、変形部位の数と同居家族の有無に有意差が認められた。年齢、性別、罹患期間、生物学的製剤使用の有無、右手・左手の握力、手のこわばり、Health Assessment Questionnaire（HAQ）、上肢の疼痛の Visual Analogue Scale（VAS）に有意差はなかった。

考察：本研究から RA 患者は、生活の中で手洗いをする習慣は身についているが、普段の手洗いでは感染予防を意識した手洗いにまで結びついていなかった。RA 患者の個別性を考慮した手洗いの手技を高める働きかけが重要である。変形部位の数が多いほど洗い方を工夫する必要があるとあり、上肢機能の専門である作業療法士と連携を図りながら手洗い手技の向上に繋げることが重要であると考えられる。さらに、同居家族のいない人ほど、生活習慣や治療経過などから感染予防について話し合い、生活の見直しや予防行動への促しを支援することが重要であると示唆された。

結論：RA 患者の手の洗い残しに関連する要因は、変形部位の数と同居家族の有無に有意差が認められた。作業療法士と連携した繰り返しの教育により、感染予防を目的とした手洗い手技につなげることの重要性が示唆された。

本研究にあたりご指導いただきました永吉雅人先生に心より感謝申し上げます。

利益相反：令和 3 年度新潟県立看護大学看護研修センター地域課題研究助成を受けて実施した。

整形外科患者の就労支援に対するニーズ

1. 研究代表者及び所属

研究代表者：土屋 尚

所属：新潟労災病院

2. 研究分担者氏名

- ・岩崎 美月 （所属：新潟労災病院）
- ・野俣 和久 （所属：同上）

3. 学内責任者

新潟県立看護大学 ：酒井 禎子

4. 研究助成金執行報告

(円)

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	0	0	80,931	18,320	99,251

5. 研究成果の公表（100 字以内）

予定なし

整形外科患者の就労支援に対するニーズ

土屋尚¹⁾, 岩崎美月¹⁾, 野俣和久¹⁾, 酒井禎子²⁾

1)新潟労災病院 2)新潟県立看護大学

キーワード：就労支援，整形外科，ニーズ

1. 目的

整形外科患者の就労支援に対するニーズを明らかにする

2. 方法

上肢あるいは脊椎疾患により手術目的で入院した18～65歳の就労している患者10名(上肢5名・脊椎5名)を対象に、半構造的インタビューを入院中と外来通院中の計2回行った。インタビュー内容は逐語録し、就労支援に対するニーズを表す内容を抽出してコード化、さらにカテゴリー化を行った。

3. 倫理的配慮

研究協力に関する自由意思の尊重、個人情報保護などについて口頭と文書で説明し、同意を得た対象に調査を行った。調査に先立って、A病院の看護倫理委員会の承認を受けて実施した。

4. 結果

就労支援のニーズとして【今後の予定、治療のなりゆきが知りたい】【仕事に早く復帰できるように支援してほしい】【医療者と仕事の相談をしたい】の3つのカテゴリーが抽出され、カテゴリーに含まれるサブカテゴリーでは上肢、脊椎疾患で相異が見られた。上肢疾患では、【今後の予定、治療のなりゆきが知りたい】には、『入院期間を知りたい』、『今後の治療の方向性を知りたい』、『退院後の回復経過を知りたい』の3つのサブカテゴリーが含まれた。【仕事に早く復帰できるように支援してほしい】には、『可能な作業で仕事復帰をしたい』『仕事上の動作をリハビリテーションで練習したい』、『仕事上の具体的な制限や注意点を知りたい』、『医療者から職場へ情報提供してほしい』『運転できる時期を知りたい』の5つのサブカテゴリーが抽出された。脊椎疾患では、【今後の予定、治療のなりゆきが知りたい】には、『退院後の回復経過を知りたい』の1サブカテゴリーが抽出された。【仕事に早く復帰できるように支援してほしい】には、『仕事上の制限や具体的な注意点を知りたい』、『医療者から職場への情報提供してほしい』、『生活に活かせる具体的なアドバイスが欲しい』の3つのサブカテゴリーが抽出された。

5. 考察

上肢疾患では、クリニカルパスがある脊椎疾患と違い、障害の程度や治療過程に個人差があり、クリニカルパスがない場合がほとんどである。また職場との調整がなされないまま緊急入院となることが多いため、入院期間や治療の方向性など【今後の予定、治療のなりゆきが知りたい】幅広いニーズがあることが明らかになった。『運転できる時期を知りたい』というニーズは、通院・通勤のために運転が必要となる地域において、障害が運転操作に影響する上肢疾患の特徴的なニーズであると考えられた。一方脊椎疾患では、脊椎に負担がかかりにくい日常生活動作を獲得できるよう、指導や支援が必要と言える。

その他、看護師は、患者が就労について相談しやすい環境を築くこと、リハビリテーション職を含む多職種間で調整役となり就労をチームで支えられるよう支援すること、事業者と連携し、機能障害や動作制限があっても患者の状態に合ったスタイルで就労できるよう支援することが重要な課題であると考えられた。

6. 結論

脊椎疾患と上肢疾患共に、【今後の予定、治療のなりゆきが知りたい】【仕事に早く復帰できるように支援してほしい】【医療者と仕事の相談をしたい】という3つのニーズがあることが明らかとなった。

本研究は、令和3年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した。

本研究による利益相反はない。

当院の退院支援の評価からみえた課題 ～退院支援評価表を分析して～

1. 研究代表者及び所属

研究代表者：水澤 三津江

所属：新潟労災病院

2. 研究分担者氏名

・佐藤 絵美（所属：新潟労災病院）

・角張 澄恵（所属：同上）

3. 学内責任者

新潟県立看護大学：大久保 明子

4. 研究助成金執行報告

(円)

予算額	90,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	0	0	43,494	10,533	54,027

5. 研究成果の公表（100 字以内）

予定なし

当院の退院支援の評価からみえた課題 ～退院支援評価表を分析して～

水澤三津江¹⁾ 佐藤 絵美¹⁾ 角張 澄恵¹⁾ 大久保明子²⁾

1)新潟労災病院 2)新潟県立看護大学

キーワード：退院支援，評価，課題

研究の概要

【目的】超高齢社会を背景に，わが国の医療体制は「病院完結型」から「地域完結型」への転換が勧められ，病院では円滑な在宅療養移行支援が求められている．実施している退院支援の評価として，当院から退院された患者の包括支援担当者，居宅ケアマネージャー，訪問看護師，施設・障害相談支援専門員など（以下，地域担当者とする）から退院支援評価表を記入し返信していただいている．そこで，過去 5 年分の退院支援評価表を分析し，地域担当者からみた当院の退院支援についての課題を明らかにし，その課題に対する対応策について検討することを目的とする．

【方法】事業所の管理者または，地域担当者本人から研究に使用することの同意が得られた過去 5 年間の退院支援評価表（2016～2020 年）を対象に，退院支援評価表の自由記載の内容をコードとして抽出し，コードの意味内容が類似するものをまとめてサブカテゴリ・カテゴリに分類し，質的記述的に分析した．本研究は，所属施設の看護倫理検討委員会の承認を受けて実施した．

【結果】地域担当者による当院の退院支援の評価は，肯定的評価と否定的評価に分けられ，肯定的評価として 78 のコードが抽出され，13 サブカテゴリ，【感染予防対策を考慮した情報共有】【退院支援の早期の取り組み】【事業所等との適切な情報共有】【患者・家族の意向に沿うための連携】【自宅退院に対する介護者の不安や生活状況に配慮した対応】【熱心で丁寧な対応】の 6 カテゴリに分類された．否定的評価として 53 のコードが抽出され，8 サブカテゴリ，【退院前カンファレンスの開催時期や方法】【患者・家族の意向確認と連絡の遅れ】【事業所等への情報提供の不足】【かかりつけ医との連携体制の不備】【患者や家族へのリハビリ内容や骨折のリスクに関する説明不足】の 5 カテゴリに分類された．

【考察】当院の退院支援に対する否定的評価の結果から，情報提供の不足，患者家族の意向確認の遅れ，退院前カンファレンスの開催時期について課題があることが明らかになった．情報不足については，看護サマリーの記載方法が専門用語や略語の使用による理解しにくい表現や，地域担当者が必要としている情報の不足があったことが考えられた．また，患者家族の意向確認の遅れについては，患者・家族との退院後の生活に向けた話し合いや地域担当者との情報共有が不十分であったことが原因と考えられた．さらに，カンファレンス参加予定者の都合や患者の状態が安定しなかったこと，サービス利用の手続きに時間を要したことに加えて，入院当初からの連携不足により退院前カンファレンスの開催時期が適切でないとの評価を得たと考えられた．

【結論】退院支援の課題について，看護サマリーの記載内容を確認する必要があること，地域担当者の必要としている情報について病棟看護師が理解する機会を設けること，必要事項が漏れなく統一した記載ができるように内容の充実を図る必要性が示唆された．また，入院早期から患者・家族の意向を確認するように努めることや，サービスの内容や患者の病状が安定する時期を見通した退院前カンファレンスの開催時期を検討していくこと，入院前から退院支援を念頭に関わることの重要性が示唆された．

なお，本研究は令和 3 年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した．本研究による利益相反はない．

令和 4 年度
公立大学法人新潟県立看護大学
看護研究交流センター 活動報告書

令和 5 年 4 月 発刊

発行 公立大学法人 新潟県立看護大学 看護研究交流センター
〒943-0147 新潟県上越市新南町 240 番地
TEL・FAX 025-526-2822